あの娘は電波か本物か

沙φ亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの娘は電波か本物か

【Ｎコード】
Ｎ２３０７Ｙ

【作者名】
沙Φ亜竜

【あらすじ】
「わらわは、女王卑弥呼の生まれ変わりじゃ！」
そんなことを言い張る中野真綿は中学二年生の女の子。家が隣同士という幼馴染みの藤原勇授（ゆうじゅ）とともに、騒がしいながらも楽しく日々を過ごしていた。
そんなふたりの前に現れた蘇我春歌。彼女は卑弥呼の家臣だった人物の生まれ変わりだという。そして真綿は、卑弥呼だった頃、家臣に寝首をかかれて殺されたということを思い出す――。

1

「わらわを愚ろうするとは、失礼千万！　そこになおれ、愚か者！」

いつものごとく、教室に響き渡る女の子の声。

可愛らしい声質だというのに、なんたる高圧的な喋り方だろう。

この子は中野真綿（なかのまわた）ちゃん。

ぱっと見だけなら、どこにでもいる普通の女の子っぽいのだけど。

普通の女の子ではないっていうのは、その喋り方からも明白だよね。

「な……なんだよ、中野！　おまえ、なんでそんなに偉そうなんだよ！」

愚か者呼ばわりされた男子生徒が、さすがに文句の言葉を叫び散らす。

ま、それも当然の反応というものか。

とくに都会というわけでもなく、田舎ってわけでもない、ここ、三沢山原町（みさわやまはらちょう）。

なにやら、沢で山で原でと、わけのわからないネーミングの町ではあるけど。どこにでもあるような静かな住宅街だ。

そしてその一角に存在する、三沢山原第二中学校。

その二年二組の教室で今、騒がしい言い争いが繰り広げられていた。

なんというか……子供らしくていいとは思うけど……。

それにしたって、あの喋り方はないだろう。

いやはやまったく、最近の若者っていうのは、礼儀がなってないな。

……と言ってしまうのも、ちょっと問題があるかもしれない。

なにせあの真綿って女の子には――。

「偉そうとはなんじゃ！　わらわは本当に偉いのじゃ！　頭が高い！」

「ふざけんな！　泣かしてやろうか！？」

おっと、いつの間にやら言い争いがエスカレートして、今にも取っ組み合いのケンカでも始まりそうな雰囲気になってしまったようだ。

確かにあんなことを言われたら怒るのももっともだとは思うけど、それでも男子たるもの、女子に手を上げてしまうというのは、いささか教育がなっていないと判断せざるを得ない。

こぶしを振り上げて真綿ちゃんを威嚇し始める、怒り心頭の男子生徒。

おそらく彼は、いくらおかしな喋り方をしていても真綿ちゃんは女の子だから、暴力を振るわれると感じたら引き下がるだろうと、そう考えたに違いない。

でも、予想どおりというべきか、彼女はやっぱり普通じゃなかった。

「はっ！　言葉で敵わなぬとすぐに暴力に訴える。なんと低俗な男であろう。汚らわしいのぉ。おぬしなぞと言い争いをしているだけでも、汚らわしさがうつってしまいそうじゃ。それ以上、近寄るでないぞ！」

「な……！　てめぇ、許さねえ！　女だからって手加減しないから

な！　歯ぁ食いしばれ！」

怒りで真っ赤になった男子生徒が、こともあろうに真綿ちゃんの顔面目がけて、鋭いパンチを繰り出す。

うわぁ……。

いくらなんでも、あんなのを食らったら、さすがにひとたまりもないだろう。下手をしたら、鼻の骨が折れてしまうかもしれない。

このケンカっ早い男子生徒は、ボクシング部所属だったりするわけだし。

プロじゃないにしても、一応トレーニングなんかもしている身の上で、ケンカにこぶしを持ち込むだなんて、やっぱり教育がなっていない。

でもその男子生徒のこぶしは、真綿ちゃんの鼻っ柱を折ることはなかった。

折るどころか、ターゲットである彼女の顔面にまで、届きすらしない。

彼女の顔面にぶつかる間際、パシッといい音を響かせて受け止められたからだ。

「やめなよ。こんなでも、一応女の子なんだから」

ここでようやく、王子様の登場だ。

彼は藤原勇授（ふじわらゆうじゅ）くん。

颯爽と登場したものの、なんだかパッとしない容姿で、細身だし、見るからに弱々しい。頼りになるような存在とは、お世辞にも言えなかった。

とはいえ、そんな弱々しい彼でも自分を助けるためにこうして飛

び出してきてくれたのだから、真綿ちゃんのほうもさぞや感謝していることだろう――と考えるのは、このふたりに関する初心者だけだ。

「一応ってなんじゃ！　この無礼者！　おぬしはわらわの下僕なんじゃから、もっと素早く行動せねばいかんじゃろう！？　こんな愚か者なぞ、あらかじめ排除しておくくらいの気遣いは見せてほしいものじゃ！」

「あははは……、そうだね。ごめん、真綿」

なんというか、あまりにもひどい言われよう。

それなのに対する勇授くんのほうは笑顔を崩さず、べつに自分は悪くないだろうに、素直に謝罪の言葉を述べる。

「真綿様と呼べと、いつも言うておろうが！」

バシバシバシ！

「あはははは……」

不条理な言われようの上に、頭への平手打ちを容赦なく食らいながらも、勇授くんはただ笑い声を上げるのみ。

「ちっ……。もういいや。おれの負けだよ。ったく、勇授もどうしてこんな電波女の肩を持つんだか」

「無礼な！　わらわを愚弄するとは、失礼千万！　おぬし、もう一度そこになおれ！　天誅を食らわ……もごごごごっ！？」

さすがに呆れたのか、捨てゼリフを吐いて立ち去ろうとしていた男子生徒に、真綿ちゃんはなおも食ってかかろうとする。

勇授くんは、そんな彼女の口を手のひらで塞いでで押さえつけた。

「はいはい、わかったから。でももうチャイムも鳴ったから。席に着こうね」

「む、むぅ……。仕方がないのぉ……」

不満を漏らしながらではあったけど、真綿ちゃんは勇授くんに引きずられながら、しぶしぶと席に戻っていくのだった。

周りの生徒たちにとって、はた迷惑なだけのふたりではあるけど、何者をも割り込ませない独特の雰囲気を漂わせている。

ま、ボクとしては、そうでなくては困るのだけど。

2

「わらわは、女王卑弥呼の生まれ変わりじゃ！」

真綿ちゃんは、そう言い張っている。

だからこそ、あんな高圧的な喋り方をしているのだ。

クラスメイトたちはもちろん、「なに言ってんだか、この電波女」的な冷めた視線で見ているわけだけど。

たまにさっきの男子生徒のように突っかかってくる人もいる。

いつものことだとわかってはいても、さすがにあんな喋り方で人を見下したような態度を取られたら、思わず怒りに我を忘れてしまっても不思議ではないだろう。

そんなとき、真綿ちゃんをいつでも守っている、というかフォローしているのが、さっきも男子生徒のこぶしを受け止めた、あの勇授くんだった。

生まれたときから家が隣同士だったふたりは、いわゆる幼馴染みというやつだ。

小さい頃から気づけばいつでもそばにいて、常に一緒に遊んでいる仲だった。

もう、そばにいるのが当たり前、という感じになっているだろう。

ふたりは同じ幼稚園に入り、同じ小学校に通い、同じ中学校に入学した。

小学校に在籍している頃には違うクラスとなったこともあったけど、中学二年生の今では同じクラスとなっている。

教室内でも自然と一緒にいることが多くなり、いつも仲よくお喋

りしている……というよりも、じゃれ合っている、と言ったほうがいいのかもしれない。
昔からずっと一緒だから、それが当たり前となっているのだろう。

周りから見れば、それはさながら夫婦漫才のように息のピッタリと合った、誰にも邪魔のできないふたりだけの世界、という印象だった。
喋り方は変わっていても、それを気にするふうでもない勇授くんと、文句を言ったりはしながらも、彼に絶大な信頼を寄せているとしか思えない真綿ちゃん。
どう考えても、お似合いのカップルとしか言いようがないのだ。

本人たちは今のところ、お互いにただの幼馴染みとしか思っていないみたいだけど、将来的にはいつの間にかくっついていたりするのだろう。
というか、しつこいようだけど、ボクとしてはそうなってもらわなきゃ困るのだ。

「ふ～、歴史の授業というのは、どうしてこうもつまらないのじゃろうか」

チャイムが鳴って教師が教室から出ていったのを見計らい、真綿ちゃんはため息まじりの言葉を吐き出す。
傲慢な物言いをする真綿ちゃんではあるけど、教師に対してはさすがに遠慮があるようだ。
いくら女王卑弥呼の生まれ変わりを自称する彼女でも、停学とか退学とかになったら困る、という考えはあるのだろう。

「真綿、卑弥呼の生まれ変わりだとか言っておきながら、歴史は苦手？」

「あのな、勇授。当たり前じゃが、わらわがもともと生きておった時代には、邪馬台国も過去の歴史ではなかったのじゃぞ？」
「あ～、なるほど。確かにそうだね～。あははは」
「むぅ、勇授！　ちょっとわらわをバカにしておらんか！？」
「え？　そんなことないよ～。あははは」
「その軽い笑いが、なんかムカつくのじゃ！」
「あははは。でも卑弥呼様は、ムカつくなんて言葉は使わないと思うな～」
「うっ！　それは、その……、郷に入りては郷に従えというやつじゃ！　時代に合わせて臨機応変に対応するのが、女王としての務めなのじゃ！」
「はいはい、わかったわかった」
「ぐあ～！　その態度がムカつくと言うておるのじゃ～～～！」

そんなやり取りを、恥ずかしげもなく続けているふたり。
もちろんクラスメイトは、生温かい目で遠巻きに見ているわけだけど……。

「にゃははっ！　勇授と真綿ちゃんは、相変わらず仲がいいね～！」
「ふふっ、ほんとね。ちょっとうらやましくなっちゃうくらい」

そんな勇授くんと真綿ちゃんに、ふたりのクラスメイトが近づいてきた。
他のクラスメイトたちとは違い、このふたりだけはさほど気にすることなく、勇授くんと真綿ちゃんの世界に足を踏み込んでくる。

「なにを言うておる！　わらわと勇授は、主人と下僕の関係じゃ！　勘違いするでない！」
「あははは」

きっぱりと言いきる真綿ちゃんにも、勇授くんはお馴染みの笑い声を上げるだけ。

「にゃははははっ！　勇授は勇授で、笑ってばっかだし！　ま、いいけどさっ！」

この、にゃははと笑っているほうは、天童孝徳（てんどうたかのり）くん。

非常に明るいのだけど、少々適当な性格。笑い声だけじゃなく容姿もなんとなく猫っぽい感じで、八重歯がチャーミングな可愛い系。

名前からもわかるとおり、もちろん男子生徒だ。

ただ、中学生だというのに小学生と見まごうばかりの背の低さ。女子から可愛いと言われて頭を撫でられたりするたびに、「やめろ〜！　おいらは子供じゃないやいっ！」と、まだ声変わりをしていなさそうな声で叫ぶ。

その声を聞いた女子たちは余計に、「きゃ〜、かっわい〜！」とさらに声を大にして騒ぎ出す結果となるのだけど。

「あまりよくないと思うな。勇授くんはもうちょっと自己主張したほうがいいと思うよ。嫌なら嫌って、ビシッと言わないと。……あ、でも、嫌じゃないのかな？　ふふっ」

そして、控えめながらもはっきりと意見を示しているこの子のほうは、山本紗月（やまもとさつき）ちゃん。

声は小さいし、ちょっと地味な印象を受けるため、とてもおとなしい女の子というイメージで見られがちなのだけど。

でも意外と、芯のしっかりとした子でもある。

真綿ちゃんは自分のことを女王卑弥呼の生まれ変わりだなどと言って、高圧的で見下したような態度を取る。

触らぬ神に祟りなし。

そう考えているほとんどのクラスメイトは、真綿ちゃんに対して積極的に話しかけたりはしない。

例外なのは、幼馴染みの勇授くんを除けば、この孝徳くんと紗月ちゃんのふたりくらいだった。

そんなわけで、教室内では自然とこの四人で一緒にいることが多くなっていた。

3

さて、真綿ちゃんがこんなふうになってしまったのは、今をさかのぼること三年前、彼女たちが小学校五年生のことだった。

そう、それ以前は、彼女はこんな喋り方をしていなかったのだ。

とりあえず、一旦その頃まで時間をさかのぼってみることにしよう。

幼馴染みだった真綿ちゃんと勇授くんは、幼稚園の頃から小学校二年生まで同じクラスで、もちろんいつでも一緒にいたわけだけど。

三年生に上がったふたりは、違うクラスになってしまう。

真綿ちゃんたちが通っていた小学校――今通っている中学校のすぐ隣にある、三沢原山第二小学校――では、クラス替えがあるのは二年ごとだった。

というわけで、それから二年間、真綿ちゃんと勇授くんは離ればなれになってしまった。

家は隣なのだから、クラスが違っても仲よく遊んでいたってよかったとは思うのだけど。

初めて違うクラスになったのが相当ショックだったのか、その頃の真綿ちゃんは、なかなか勇授くんに会いにいくことができなかった。

登下校の時間くらい、一緒にいてもよさそうなものだけど、それすら気が引けていたようだ。

今の真綿ちゃんだったら、問答無用で勇授くんの首根っこを引っつかんででも一緒にいようとするだろうけど。

当時の彼女は、ちょっと内気なところもある普通の女の子だったのだ。

そうやって、離ればなれになっていた二年間を経て、ふたりは五年生でまた同じクラスとなった。

「あっ、真綿、おはよう。同じクラスだね」

にこっ。

真綿ちゃんの心を代弁すると、澄み渡った青空のような爽やかな笑顔を向けながらそう話しかけてきた勇授くんに、神様が幸せの時間を与えてくれたとまで感じたらしい。

ただ、真綿ちゃんはそれまでの二年間、ほとんど勇授くんと会えないあいだにも、ずっと彼のことを考えていた。

もっと積極的に話したい。

今度同じクラスになれたら、絶対に自分から勇授くんに寄り添って、二度と離れないようにしよう。

そんな決意を胸に、五年生のクラスが発表される始業式を迎えた。

真綿ちゃんの想いが、あまりに強かったからだろうか。

彼女は、覚醒した。

「そうじゃの！　これから二年間、勇授はわらわとずっと一緒じゃ！　というか、中学生になっても、それ以降も、ず〜っと一緒にいるのじゃ！　よいな！？」

以前よく話していた頃の真綿ちゃんとは、かなり違った感じの喋り口調に、さすがの勇授くんといえども一瞬呆然としていた。

でもすぐに、

「あははは。うん、もちろんだよ」

笑顔に戻った彼は、そう言って真綿ちゃんを見つめ返していた。

☆☆☆☆☆

「わらわは、女王卑弥呼の生まれ変わりなのじゃ！」

そう言い始めたのは、この小学校五年生からだった。

「あ～、なるほど～。だからそんな喋り方になってたんだね～。あははは」

真面目な顔のまま、どう考えてもイカれているとしか思えない妄言を叫ぶ真綿ちゃんに対して、微妙に軽いというか空気のように薄い笑い声を漂わせながら、勇授くんはそう言って応える。

もちろん声を潜めたりなんてしていないから、クラスメイトにも会話は筒抜け。

そこかしこで、チラチラとふたりに視線を向けながら、ひそひそとなにやら話している姿が確認できた。

「なにあれ？　卑弥呼の生まれ変わりって……」「マジかよ？　あいつ、頭おかしいんじゃないか？」「ふふっ……。ちょっと興味あるわ……」「う～ん、やっぱり、あまり近寄らないほうがいいのかなぁ……」「あんな奴がクラスにいるなんて。二年間、大変そうだ……」「にゃはは！　でも、退屈しないですみそうだよっ！」「見てる分には面白いかもしれないけど、下手に関わると面倒なことになるかも……」

口々に勝手なことを口走るクラスメイトたち。

その中に、密かに孝徳くんと紗月ちゃんのふたりも混じっていたりしたのだけど。

否定的な意見を言うクラスメイトが多かった中、肯定的な言葉を挟んでいたのが、そのふたりだった。

とはいえ、孝徳くんと紗月ちゃんが真綿ちゃんたちと仲よくなるのは、もうちょっと先のことになる。

クラスメイトから微妙な視線を受け、ひそひそと噂される日々。

でも、真綿ちゃんも勇授くんも、まったく気にする様子はなかった。

ふたりはこの頃から、普通とはちょっとずれた雰囲気を持っていたということだろう。

「わらわは女王じゃからの。なんでも思いどおりになるのじゃ！」

「あはははは、そうなんだ～」

「そうじゃ。勇授とまた同じクラスになれたのも、わらわが願ったからなのじゃ！」

「あはははは、それは光栄だなぁ～。でもそれなら、どうして三、四年は違うクラスになっちゃったのかなぁ？」

「あ……揚げ足取りは禁止じゃ！」

「あはははは」

ともかくこうして、真綿ちゃんの女王卑弥呼生活が始まったのだ。

4

「ここはわらわのテリトリーじゃ！　なんぴとたりとも、通ることは許さぬ！」

「あのなあ！　こっちには日直の仕事があるんだから、わけのわからないこと言ってないで、そこをどけって！」

またいつものように、真綿ちゃんのわがままが始まったようだ。

黒板消しを持った日直の生徒の前で、真綿ちゃんが仁王立ちになって通せんぼをしている。

彼女が立っているのは、ベランダへと出るドアの前だった。

「なにを言うておるか！　わざわざわらわのテリトリーを侵害することもあるまい？　教室の後ろ側のドアからだって出られるであろう？」

「アホか！　黒板の前からベランダに出るのに、なんで後ろまで行かなきゃならないんだよ！」

「じゃが、後ろの黒板にだって黒板消しはあるのだぞ？　それも一緒に綺麗にすべきではないか？　そのためにはほら、一旦教室の後ろまで行くことになるではないか！」

「後ろの黒板消しなんて、ほとんど汚れないっての！　だいたい、どうして前のドアが中野のテリトリーになるんだよ！？」

「わらわの席は一番前じゃ。ならば、机と椅子のある場所から教室の前の壁までが、わらわのテトリーになるのが道理というものじゃ！」

「んなわけあるか！　だったら教卓前の席の山本は、教卓も含めて黒板のところまでテリトリーなのかよ！？　教卓に先生が立ったら、テリトリー侵害か！？」

「うっ……！　そ……そうじゃ！　紗月には、教卓に立った先生を

葬り去る権利があるとも言えるのじゃ！」
「くっ、こいつ、なにがあっても非を認めないつもりかっ……！」
「わらわに非などない！　わらわが世界の法律じゃ！」
「はいはい、真綿。どうどう～」

子供のような言い争いが続いていたのを、ようやく勇授くんが止めに入る。
もちろん、十中八九、というか百中九十九、真綿ちゃんが悪いということも、わかっているのだろう。
勇授くんはいきなり真綿ちゃんをなだめる言葉をかけていた。

「こら勇授、なぜいきなり後ろから羽交い絞めにする!?　放せ！　放すのじゃ！」

おっと、なだめるだけではなくて、強制的に押さえつけていたようだ。
さすが勇授くん。真綿ちゃんの扱いに慣れている。真綿ちゃんマスターだ。
いきなり背後から女の子を羽交い絞めにするなんて、普通だったら許されないことかもしれない。
でも、このふたりは普通ではないのだ。

もっとも、勇授くんはともかくとして、羽交い絞めにされている真綿ちゃんのほうは、顔を真っ赤に染めているように見える。
羽交い絞めとはいえ、男子にいきなり抱きつかれているような状況なのだから、そりゃあ恥ずかしくて赤くもなるというものか。
ま、真綿ちゃんの場合、もうちょっと別の想いが影響している、というのもあるだろうけど。
きっと勇授くんはそれを見ても、怒って真っ赤になってるな～、としか思わないはずだ。

なぜなら彼は、とてつもなく鈍いからだ。

それはともかく、勇授くんは羽交い絞めにした真綿ちゃんを引きずって無理矢理席に座らせると、

「浜村くん、どうぞ。通っていいよ」

と言って、日直の彼に道を勧める。

「あ……ああ。ありがとな、藤原」

突然場が静まることになって呆然としながらも、浜村くんはどうにかお礼だけ述べてベランダへと出ていく。

「もごごごごごごごご……！」

そのあいだ、羽交い絞めにしながらも、前側に回していた右手で真綿ちゃんの口を塞いでいた勇授くん。

暴れる真綿ちゃんを、完全に押さえ込んでいた。

ひ弱そうな見た目だというのに、実のところは結構な力持ちのようだ。

いや、ここは、真綿ちゃんが女の子らしく非力だから簡単に押さえ込めた、と言っておいたほうがいいだろうか。

……今さら、って気もするけど。

「もごごご……、こら勇授！　口を塞ぐな！　息苦しいであろう！？」

口を塞いでいた勇授くんの手のひらを、どうにかこうにか振り払

い、真綿ちゃんがわめき声を上げる。

「にゃははっ！　口を塞ぐなら、どうせだったら勇授の口で塞いでほしかったとかっ？」

「ふふっ。さすがね。もうラブラブで見ていられないほどだわ。……もちろん、じっくり見るけど」

と、突然ふたりの友人、孝徳くんと紗月ちゃんが話しかけてきた。

「あはははは」

そんな言葉を聞いても、勇授くんはいつもの笑い声を漂わせるだけだった。

「な……！？　わ……わらわは、べつにそんな……！　だ……だいたい、わらわと勇授は、主人と下僕の関係じゃと、何度も言うておろう！？」

一方の真綿ちゃんはまたもや真っ赤になって、汗を飛ばしながら慌てた声を響かせる。

「……じゃが、口で塞いでもらえたほうがよかったというのは、確かじゃと思うが……（ぼそぼそ）」

なにやら小声でつけ加えてはいたけど。

もちろん鈍感な勇授くんの耳に届くはずはなかった。

「そういえば、ちょっと聞こえてきたんだけど、わたしって教壇に立った先生を葬り去る権利があるの？」

「うっ……！　そ……そうじゃ……！」

微かにイタズラっぽい笑みを浮かべながら放った紗月ちゃんの言葉に、真綿ちゃんは声を詰まらせながらもそう答える。
女王卑弥呼だと言い張っている彼女には、間違いだったとか嘘だったとか、そういった答えは意地でもできないのだろう。

「にゃははっ！　じゃあ、次の先生、殺っちゃってよ！　おいら、英語苦手だからさぁ！　それに、ヘルプミー！　って叫んでるところも見てみたいしね！」
「ふふっ、そうね。真綿ちゃんに言われたので葬り去ることに決めました、って宣言してから、先生を亡き者にするわね」

紗月ちゃんのイタズラに、孝徳くんも悪乗りしてくる。そしてそれに、さらに乗っかる紗月ちゃん。

「な……！？　いや、じゃが、やはりその、先生にもわずかばかりの人権というものがあるのじゃからして、かわいそうだし、やめておくのがよいと、わらわは思っておるのじゃが、その……」

内申書のためといった理由もあるのか、やっぱり先生に対しては猫をかぶりたいのだろうか、真綿ちゃんはおろおろしながら、ぼそぼそと言い訳の言葉をつぶやいていた。

「あはははは。真綿ってやっぱり、真綿だなぁ」
「な、なんじゃその言い方は～！？」

いつもの笑いをたたえながらの勇授くんのツッコミに、真綿ちゃんは再び大声で文句の言葉を叫ぶ。
三沢原山第二中学校二年二組の教室は、今日もとっても賑やかだった。

5

女王卑弥呼の生まれ変わりだなどと言い張り、あんな高圧的な喋り方をする真綿ちゃんだというのに、勇授くんは小さい頃からずっと一緒にいる。

小学校三、四年の頃だけは離れてしまっていた感じだけど、中学二年生になった今でも文句のひとつも言わずに、真綿ちゃんのわがままにつき合ってあげている。

なんというか、すさまじい我慢強さとも言える。

ま、真綿ちゃんの陰に隠れて目立たないけど、勇授くん自身もかなりの変わり者だったりするわけだから、とってもお似合いのカップルだと言えるのかもしれないけど。

小学校五年生で真綿ちゃんが「覚醒」してから丸三年以上、わがままに振り回され続けている勇授くん。

ふたりは家がお隣同士の幼馴染みだというのは、前にも言ったとおり。

それじゃあ真綿ちゃんが覚醒する前、クラスも一緒だった小学校二年生までは、いったいどうだったのだろう？

……なんて疑問を浮かべていたりはしないかな？

興味ないなんて、つれないこと言わないでほしい。

ま、ふたりの関係に興味がなくても、ふたりの可愛らしい姿くらいは、見ても損はないんじゃないかな？

というわけで、ちょっとだけ、ふたりが幼稚園の頃の思い出ものぞいてみることにしよう。

八年前のある日、勇授くんは隣の真綿ちゃんの家に遊びに来ていた。

どこまで広がっているのか目を疑いたくなるほどの、広い敷地がある豪邸。

そこが、真綿ちゃんの家だった。

家、というより、お屋敷と呼ばなければ失礼な気さえする。

そのお屋敷の庭で今、真綿ちゃんと一緒になって、さらにはペットであるフサフサの白い毛をなびかせる大型犬――アフガンハウンドという種類の犬――とも一緒になって、幼い勇授くんが楽しそうにはしゃぎ回っていた。

「勇授くんは、いつも元気ね～。おばさんにも分けてほしいわ～」

ガーデンチェアーに座って子供たちの様子を眺めていた真綿ちゃんのお母さんが、とても優しそうな微笑みをたたえながらそう声をかける。

「だめよ、ママ！　ゆうじゅは、あたしのなんだから！」

眉をつり上げた表情も可愛らしく、腰に両手を当てながら、真綿ちゃんはぷんぷんと怒りの言葉を返す。

覚醒していない彼女は、こんな喋り方だった。ごく普通の女の子、といった印象だろうか。

今では聞き慣れてしまった感のある「わらわ」という言い方もせず、自分のことを「あたし」と言っていた。

もっともその言葉の内容から考えるに、勇授くんが自分の下僕だと言ってのける現在の彼女と、根本的にはなにも変わっていないのかもしれないけど。

一方、真綿ちゃんから「あたしの」と所有物扱いされた勇授くんのほうはというと、

「あはははは」

やっぱり、お馴染みの笑い声を上げていた。

この頃から、彼はこうだったようだ。

もっとも、こうやって笑ってばかりいる原因は、真綿ちゃんのお母さんにもあるのだけど。

遊びに来るたびに、いつまでも真綿のそばで笑っていてあげてね、と彼女のお母さんからお願いされていた勇授くん。

それを言葉どおりの意味で解釈し、いつでもどんなときでも、真綿ちゃんに微笑みかけるようになっていったようだ。

「わんわんわん！」

勇授くんや真綿ちゃんよりも大きな白い毛の犬が、はしゃいだ鳴き声を響かせながら子供たちに抱きつく。

交互に抱きついていき、やっぱり飼い主がいいと思ったのか、それとも女の子が好きだからなのか、犬は真綿ちゃんの頬の辺りをペロペロと舐め始めた。……ちなみに、この犬はメスなのだけど。

「きゃっ！　こら、クロったら、やめなさい！　くすぐったいよ、きゃははは！」

この白い毛の犬の名前は、クロ。

名づけ親はもちろん、真綿ちゃんだ。

「白いわんちゃんだから、シロがいいかしら～」

真綿ちゃんが欲しいというので飼うことにした大型犬。
どんな名前がいいかを考える家族会議――とはいっても、お父さんは忙しい身の上だから、真綿ちゃんとお母さんのふたりだけだったのだけど――を始めたところ、第一声でのほほんとした感じの声を響かせたのはお母さんのほうだった。

「しろいからシロだなんて、つまらない～。この子はクロできまりっ！」

第二声は真綿ちゃん。
そしてそれは、家族会議の終了宣言でもあった。
やっぱり真綿ちゃんは真綿ちゃんと言うべきか、小さい頃からわがままな女の子だったのだ。
それにしても、メスの犬にクロという名前は、正直どうかと思うのだけど。

「あははは、まわたは、クロちゃんにすかれてるよね～」
「すかれるのはいいけど～。なめすぎだよ～。きゃははは！」

笑いすぎて涙を浮かべ始めている真綿ちゃん。

「うふふふ、反対側のほっぺは、勇授くんに舐めてもらったら？なんてね！」

そんな様子をほのぼのとした気持ちで眺めていた真綿ちゃんのお母さんが、ちょっぴり茶目っ気を出したのか、そんなことを言った。
なんてね！　という言い方からもわかる通り、冗談だったのだろう。
でも、相手は幼い勇授くん。冗談なんて通じるはずもなく。

「あはははは、それじゃあ」

ペロッ。

勇授くんは真綿ちゃんの柔らかいほっぺたを、思いっきりべっちょりと舐めた。

「きゃうっ！？　いやぁ～ん、ゆうじゅってば、ほんとになめたぁ～！　き……きたない～！」

「あはははは」

汚い、なんて言われても、勇授くんはやっぱり笑っている。

もっとも、真っ赤になって恥ずかしがりながらポカポカと勇授くんの肩口の辺りを叩いている真綿ちゃんの様子を見れば、本気で汚いなんて思っていないことはわかるだろうけど。

「うふふふふ」

こんな感じでじゃれ合っている仲むつまじいふたりの様子を、真綿ちゃんのお母さんはやっぱりたおやかな笑顔を浮かべつつ、見守っているのだった。

というわけで、幼稚園の頃から、お母さん公認で仲のよかったふたりだった、というのがわかっていただけただろう。

6

さて、再び話を現在に戻すとしよう。

三沢原山第二中学校の二年二組の教室で、いつものように怒鳴っている女子の声と、聞いた人が若干バカにされているのかもと誤解してしまいそうにも思える男子の笑い声が響いていた。

当然のことながら、真綿ちゃんと勇授くんの声だ。

ふたりはもう、クラス中の誰もが認める仲、ということになる。

もちろん真綿ちゃんは、「わらわと勇授は、主人と下僕の関係じゃと、何度言えばわかるのじゃ！　き～～～～！」と、金切り声を上げながら否定するだろうけど。

ま、笑い声が絶えないクラスというのは、今どきとしては非常に珍しいかもしれない。

そういった意味では、とてもいい雰囲気だと言えるだろう。

……それが授業中でなければ、だけど。

「ちょっとみんな、静かにしてください～！」

教壇に立った女性が、必死になって生徒たちに呼びかけている。

このクラスの担任である、比奈鏡（ひなかがみ）みつき先生だ。

でも、生徒たちに呼びかけながらも、少々涙目になっているように見える。

真綿ちゃんと勇授くんがいるクラスの担任なのだ、そりゃあ大変だろう。

彼女は二十七歳の国語教師。

今は勇授くんたちのクラスで授業の真っ最中だった。
本を読まない子供たちが増えている昨今、国語の授業にもなかなか興味を持ってもらえないのだろう。
活字離れと言われ続けてはいるけど、ここ最近はメールやケータイ小説なんかで、活字自体には慣れているような気がしなくもない。
もっとも、メールだと絵文字などの比率も高く、純粋に活字という扱いに括られるかは微妙なのかもしれないけど。

と、そんなことを考えているあいだも、生徒たちの騒がしい私語は続いていた。

「あう〜。みなさん、静かにしてくださいよぉ〜。ぐすっ」

どうにか静めようと声を張り上げるものの、声よりも涙が先に出てしまう、といった感じ。
この先生の場合、威厳が足りないというか、教師らしさが足りないと言わざるを得ない。

自分たちのクラスの担任だから、というのもあるだろうけど、なかなかみんな、言うことを聞いてくれなかった。
ただ、こうして涙を流し始め、めそめそしているみつき先生の姿を見ると、さすがに生徒たちも罪悪感にさいなまれるらしい。
徐々に口をつぐんでいき、やがて教室内は静寂を取り戻す。

「ぐす、みなさん、静かにしてくれて、ありがとう〜」

みつき先生は涙声ながらも、クラスのみんなにお礼の言葉を述べていた。
いやいやいや、そこはお礼を言うべき場面じゃないのでは？
なんてツッコミは、この先生には無駄というものだろうから、や

めておいてあげよう。

ちなみに。

このクラスには、スローガンがある。

スローガン、という言葉自体が、若干死語っぽい雰囲気をかもし出していなくもないけど。

ともかく、そのスローガン。

教室の前、黒板の上のスペースに横長の模造紙を貼りつけ、でかでかとした文字で書かれてあった。

「いつもにこにこ、よりよいクラス」

……なんというか、小学校ですかここは、と疑いたくなる。

みつき先生らしいといえば、らしいのだけど。

この微妙なスローガンには、先生いわく、このクラスを示す数字が隠されているのだという。

二年二組の生徒は全部で四十四人。

少子化が叫ばれている昨今の学校にしては、結構多めの人数かもしれない。

でも、空き教室が増えるからといって、じゃあ少人数制のクラスにしよう、という流れになるとは限らない。その分、教師の人数も増やす必要があるからだ。

それはともかく、このクラスのスローガン。

二年二組、四十四人のクラス。

いつもにこにこ、よりよいクラス。

つまり、

いつもに（2）こに（2）こ、よ（4）りよ（4）いクラス。

ということらしい。

なんだか、余計に小学校っぽい雰囲気になってしまった気もするけど。

そんな担任のみつき先生のもと、勇授くんと真綿ちゃんたちクラスメイト一同は、充実した学校生活を送っていた。

……たぶん、ね。

1

「わらわは、おなかがすいておるのじゃ！　なにか持って参れ！」

いつものように、いつものごとく、いつもながらに、真綿ちゃんが騒ぎ出した。

さてさて、今日はどうしたというのだろう？

ま、今が三時間目終わりの休み時間ということを考えれば、おおかたの予想はつくというものだけど。

「あはははは。ダメだよ、真綿。今なにか食べたら、給食が食べられなっちゃうでしょ？」

真綿ちゃんのわがままに、いつものように、いつものごとく、いつもながらに、勇授くんがなだめ声をかける。

「むぅ、しかしじゃな、わらわはもう、おなかペコペコなのじゃ！　餓死したらどうしてくれるというのじゃ？」

「あはははは。真綿は、ちょっとやそっとのことじゃ死なないと思うけどね」

「こら勇授！　失礼であろう！？　このデリケートでか弱いわらわに向かって！」

「あはははは。ま、いいけど。とにかくさ、ダイエットだとでも思えば、いいんじゃないかな？　最近おなかが少しぽっこりしてきてるわけだし」

「ぬあ！？　なにを言うか！　ぽっこりなどしておらん！　わらわはスマートなのじゃ！」

「あはははは。上のほうもね」

「ぬお！？　勇授、おぬし、人が気にしてることを、よくもぬけぬ

けと……！」

なんだかんだと、いつものような言い合いに発展する。

真綿ちゃんは怒りのせいで、おそらく本人も無意識のうちに立ち上がると、眉をつり上げながら勇授くんを見下ろす感じになっていた。

でもまぁ、それももちろん、勇授くんの作戦なのだろう。

休み時間は十分しかないし、こうして話しているうちに、おなかがすいているという話をうやむやにしてしまおうという魂胆なのだ。

……きっと……。

「あはははは。気にしてたんだ、真綿。だけど、中二の今でそこまで平らなんだから、この先も変わらないんじゃないかなぁ？」

「うぐっ！？　そそそそ、そんなことはない！　わらわは絶賛成長期じゃ！　きっと、きっとこれからなのじゃ！」

「あはははは。結果は二、三年後くらいにはわかるかな？　そのときが楽しみだね」

「くぅ～！　悪あがきだと言わんばかりのそんな目で見るでない！　うき～～～～！」

「あはははは。卑弥呼様がお猿さんになってるよ」

……ほんとに作戦なのかは、怪しいところかもしれない。

ま、結果として真綿ちゃんが空腹を忘れ、なにも食べずに休み時間を乗りきることができるのなら、どちらにしても同じことだけど。

「にゃはははは！　お猿さんの真綿ちゃんも、可愛いね～！」

「ふふっ、勇授くんとの夫婦漫才は、いつ見ても楽しいわ」

おっと、ここでようやく、孝徳くんと紗月ちゃんも乱入してきた

みたいだ。
もっとも、もう休み時間も残り少ないのだけど。

「紗月！　わ……わらわと勇授は、主人と下僕の関係じゃと、何度言ったらわかるのじゃ！」

真綿ちゃんは紗月ちゃんの言葉に反応して、いつもながらの焦り声をわめき散らす。
もちろん心の中では、夫婦と言われるのも悪い気はしないのぉ、などと思っていたりするのだろうけど。
と、そんな真綿ちゃんの横でいつもどおりの笑い声を上げながら、勇授くんがこんなことを言った。

「あはははは。でもぼくは、夫婦でもいいかなぁ、なんて」
「なっ！？　ゆゆゆゆゆゆ勇授！　そっ、そそそそそ、それは、まことか！？　本心なのじゃな！？」

その言葉を聞いた真綿ちゃんは真っ赤になって、勇授くんの肩をがしっとつかんで揺さぶりながら、歓喜の笑みを懸命に抑えつつ聞き返す。
いやあ、なんというか、心の中がだだ漏れになってるよね。
ただ勇授くんのほうは、べつに深い意味はなく、冗談でそう言っただけのようで。

「え？　冗談だよ？　だいたいまだ年齢的にも夫婦にはなれないし」

きっぱりとそう言い放つ。

「うぐあっ……！」

ボカボカボカボカドカバキグシャ！
勇授くんが真綿ちゃんからどつき回されたのも、自業自得というものだろう。
……ちょっぴり、最後の音が痛々しそうな気はするけど。

「にゃはははっ！　勇授は勇授で、いつもどおりだね～！　よっ、鈍感大王！」
「ふふっ、夫婦漫才から、どつき漫才にバージョンアップしたようね。さすがだわ」

ふたりの会話をさらに聞き続けていた孝徳くんと紗月ちゃんは、再びそんな感想を漏らす。
どちらの感想も、微妙に、というかかなりおかしいと思うのだけど。

鈍感大王って、いったいなに？
どつき漫才だと、バージョンアップになるの？
というか、なにがさすがなの？

……もっとも、このふたりを含めた真綿ちゃんグループには、ツッコミを入れ始めたらキリがないのだけど。

キーンコーンカーンコーン……。

と、そんなことを言っているうちに、休み時間は終わりを告げる。
真綿ちゃんの最初の願いは、叶うことなく立ち消えてしまったようだ。予想どおり。

「うあ……、すっかり忘れておったのじゃ……。仕方がないのぉ。勇授、授業をサボってなにか食べものを手に入れて参れ！」

「あはははは。冗談は顔だけに――」

ドゲシッ！

真綿ちゃんの容赦ないひざ蹴りは、勇授くんの顔面を直撃していた。

「にゃはははっ！　今日も平和だね～！」

「ふふっ、勇授くんの鼻血は、蹴りの影響かしら？　それとも真綿ちゃんのパンツが見えてたからなのかしら？」

「なぬ！？　み……見えてしまっていたのか！？　恥ずかしいのじゃ……！」

「あははは。真綿のなんて、興味ない――」

ドガッ！

「それに、そんなの今さら恥ずかしがることないでしょ。真綿の場合、存在そのものが恥ずかか――」

ゴキッ！

「にゃはははっ！　何度打たれても立ち上がる！　勇授、カッコいいぞ！」

「ふふっ、そうね。ゾンビみたいで、カッコいいわ」

……。

ま、なにも言うまい。

「あの～……。みなさん、そろそろ席に着いてください～……」

そんな中、みつき先生はいつの間にやら教室に入ってきていたら

しい。

教卓から微かに顔を出して、おずおずと生徒たちに声をかけるみつき先生の声が、教室の片隅だけで空しく響いている。

結局この時間、授業が開始されたのは、それから五分ほどあとのことだった。

2

「ちょ……！　紗月っ！　なななな、なにをしておるのじゃ！？」
「なにって、脱がしてるのよ？　脱がなきゃ、着替えられないでしょ？」
「それはそうじゃが、どうしておぬしが、わらわの体操着を脱がすのじゃ？」
「う～ん……、趣味？」
「ぎゃあっ！　変態！　近寄るでない！」
「もう、つれないなぁ。女の子同士の脱がしっこなんて、なんでもないじゃない。真綿ちゃんは、勇授くんとだって脱がしっこしてるんでしょうに」
「そそそそそそんなことするわけなかろう！　あやつは下僕じゃと、どれほど言ったら……」
「はいはい。それはいいから、腕を上げてよ。脱がせられないじゃない」
「やめろと言うておるじゃろうが～！」

女子更衣室から、なにやら怪しげな会話が聞こえてきていた。
その前の廊下を通りかかる生徒は、またか、といった顔をして足早に去っていく。出てきた彼女たちと鉢合わせして、余計なことに巻き込まれるのを防ぐためだ。
もちろん、当事者であるふたりを除く、更衣室の中で着替えている女子も、目を合わせないようにしながら静かに着替えていた。

中学生ともなると、体育の授業は男子女子で別々となる。
だから、いつでも一緒にいる真綿ちゃんと勇授くんとはいえ、体育の時間までは一緒にいられない。
体育の他に、男子は技術科、女子は家庭科と、違う授業になって

いる時間も、ふたりは離ればなれになってしまう。
それは学校という集団生活の中にいる以上、仕方がないことなのだけど。

真綿ちゃんは今でこそさすがに諦めているものの、中学に上がったばかりの一年生の頃は、「わらわは勇授と一緒にいたいのじゃ！」とわめき散らし、男子と一緒に体育の授業を受けようとして、女性体育教師にズルズルと引きずられて戻っていく、といったことが何度もあった。

とても真綿ちゃんらしいエピソードではあるけど、中学生になっても全然落ち着かない彼女は、ある意味貴重な存在なのかもしれない。

ま、それはさておき、疲れ果てたような顔で女子更衣室から出てくる真綿ちゃんと、なぜか鼻歌まじりのご機嫌な様子で出てくる紗月ちゃん。

いったい中でなにがあったのか、興味はあるけど……ここは触れないでおこう。

もちろんふたりは、しっかりと制服に着替え終えたあと。ふたりとも、体操着は布製の巾着袋に入れているようだ。

「……紗月、おぬしはほんとに、そっちの趣味があるのかや？」
「ふふっ、ご想像にお任せするわ」

並んで廊下を歩いていくふたりの会話は、やっぱり怪しい様子だった。

「にゃははっ！　真綿ちゃん、紗月ちゃん、やっほぉ～！」

と、廊下の向こうから歩いてくるのは、言うまでもないかもしれ

ないけど、孝徳くんと、そして、

「もう着替え終わったんだね。ぼくたちは、これからなんだ。孝徳のせいで、先生にふざけすぎだって怒られててね」

いつもながらのちょっとぼけ～っとしたような笑みを浮かべている勇授くんだった。

「むう、ひどいなあ、勇授！　それじゃあ、おいらだけが悪いみたいじゃんか！」

「あはははは。実際そのとおりでしょ」

「む～……。でも、反論できないと自分でも思うおいらでした！　にゃはははははっ！」

バカげた会話を交わしながら、廊下の角を曲がる。

その先にあるのが、二年二組の教室だ。

真綿ちゃんは彼らふたりと一緒に廊下の角を曲がり、はたと気づいた。

「ちょっと待つのじゃ！　おぬしら、今から教室に戻って、着替えはどうするつもりじゃ！？」

「え？　そりゃあ、教室で着替えるんだよ？　いつもどおりにねっ！」

そう、この中学校には、女子更衣室はあっても、男子更衣室はない。

もちろんプールにはあるのだけど、プールの授業があるとき以外は、カギがかかっていて入れない。

というわけで男子は、女子が更衣室に向かったあとの教室で着替え、体育が終わったら速やかに教室に戻って、女子が帰ってくるま

でに着替える、というのが常だった。
勇授くんと孝徳くん以外の男子は、すでに教室で着替え済みだろう。

「なにを言うておる！　わらわたちも今、教室に帰るところじゃぞ！？　それにもう、他の女子たちも結構戻ったあとじゃ！」

真綿ちゃんは微かに顔を赤らめながら、そう怒鳴り声を上げる。
つまり、今から教室に戻って着替えたら、ふたりの着替えシーンを拝見する羽目になる、ということだ。
いやまぁ、目を逸らしていればいいだけなのだけど。
そこはそれ、年頃の男女なわけだし、同じ教室内で着替えなんかしていたら、いやでも気になってしまうものだろう。

「え～？　でも、ぼくたちだって、着替えなきゃダメじゃん」
「トイレとかで着替えればよかろう？」
「ええ～？　でもさ、そろそろチャイムも鳴っちゃうよ～」
「す……少しくらい遅れても、構わないじゃろう？　体育の後片づけで遅くなったとか言えばいいじゃろうが！」
「えええ～？　嘘をつくのはよくないよ～？」

などと、真綿ちゃんＶＳ孝徳くんの言い争いが繰り広げられる。
と、勇授くんが果敢にもその戦いに乱入してくる。

「あははは。真綿はどうしてそんなこと気にするの？　ぼくたちはべつに、着替えを見られたってあまり気にしないよ？　全部脱ぐわけでもないんだし」
「全部脱がれてたまるか！」
「ふふっ、真綿ちゃんは、勇授くんは自分だけのものだから、他の人に見られるのは嫌だ、って言ってるのよ」

「にゃははっ！　なるほど、そうかそうかっ！」
「ち……違うと言うに！」
「あはははは。ぼく、物扱いだ」

……廊下でも騒がしい、いつものメンバーだった。
キーンコーンカーンコーン……。
そんな中、無情に響くチャイムの音。

「あ～……」
「あはははは、間に合わなかったみたいだね」

どうやら勇授くんと孝徳くんは、体操着のまま授業を受けることになりそうだ。

3

鮮やかな夕陽に染まった小道を、ゆったりと歩く若いふたり。
下校時間となり、真綿ちゃんと勇授くんは並んで歩いていた。
普通の男女だったら、とってもいい雰囲気になるシチュエーションだろうけど……。

「う〜む、登下校というのは足が疲れるものじゃのぉ」
「あはははは。真綿はちょっと重いから、足に負担が――」

ゲシッ！
相変わらず、学習能力のない勇授くんが、真綿ちゃんの蹴りを食らっている。

「重くなんかないのじゃ！」
「あはははは。だったら、お姫様抱っこでもしてみようか？」
「ぬお！？　い……いや、じゃがそれは、さすがに恥ずかしいしじゃの……」
「あはははは。やっぱり重さを正確に当てられたら、恥ずかしいよね」
「そ……そういうことじゃないわ！　というか勇授、おぬし、抱きかかえたら正確な体重がわかるのかや？」
「え？　普通わかるでしょ？」
「普通はわからぬわ！　やはり勇授は、変わった奴じゃのぉ」
「あはははは。真綿にだけは言われたくないなぁ」

う〜ん、なんだろうか、この会話は。
いつもどおりではあるけど、このふたり、もうちょっとこう思春期の男女らしい会話に発展しないものか……。

真綿ちゃんと勇授くんは、いつもこうやって一緒に登下校している。

家が隣同士だから、べつに不思議なことではないとは思うけど。

中学生くらいになると、たとえ家が隣でも、一緒に帰ったら周りから冷やかされてしまうと考え、疎遠になったりするのが普通かもしれない。

でも、このふたりに関して言えば、そんな心配はなさそうだ。

真綿ちゃんはなにを言われたところで知ったこっちゃないだろうし、勇授くんはなにを言われたところで「あはははは」と笑っているだけだろう。

なんというか、やっぱりお似合いとしか言いようがない。

ところで、よく一緒にいる孝徳くんと紗月ちゃんが見当たらないのは、家の方向が違うからだ。

校門を出たところで、真綿・勇授組と孝徳・紗月組に分かれる。

孝徳くんと紗月ちゃんは、さすがに隣同士ではないものの家が近いらしいから、こちらもっぱり幼馴染みだったようだ。

そう考えると、孝徳くんと紗月ちゃんという組み合わせも、結構お似合いなのかもしれない。

ちなみに四人とも、部活には入っていない。

この中学校では部活は自由参加となっているため、所属していない生徒も少なくないのだ。

「疲れたのじゃ～。家はまだかのぉ～」

「まだ半分だよ。とりあえず、お姫様抱っこ、しとく？」

「するわけなかろう！」

相変わらずの声を響かせ合いながら、真綿ちゃんと勇授くんは通学路を歩いていく。

そのとき。

そんなふたりの目の前に突然飛び出し、腰に手を当てて仁王立ちで行く手を遮る人影があった。

「ん？　キミ、どうしたのかな？」

それでも焦った様子を見せない勇授くんが、軽く首をかしげながら、その人影に話しかける。

すると人影は右手を前に上げ、勇授くんの隣に立つ真綿ちゃんをピッと指差す。

「あなたに用はありませんわ！　あたしはこちらの子に用がありますの！」

それは、真綿ちゃんたちと同じ中学校の制服に身を包んだ女の子だった。

リボンの色が真綿ちゃんと違うのは、学年が違うから。彼女はどうやら、三年生のようだ。

「わらわに用じゃと！？　いったいなんじゃ！？　わらわはおぬしなど知らぬぞ！？　というかまずは名を名乗れ！」

真綿ちゃんたちは二年生だから、相手は先輩ということになるはずだけど、もちろん真綿ちゃんが敬語なんて使うはずもない。

いつもどおりの高圧的な口調でまくし立てる。

「あら、そうですわね。申し遅れました、あたしは蘇我春歌（そがはるか）と申します。本日はご挨拶に伺いましたのよ」

彼女の言葉を受け、対する女の子は、なにやら丁寧な口調で答える。

こんな感じの丁寧口調だと、自分のことを「わたくし」とか言って「おほほ笑い」が似合いそうなイメージだけど、「あたし」という言い方をする彼女。なんとなく、違和感を覚えなくもない。

「あはははは。腰に手を当てて仁王立ちでご挨拶？」

「勇授は黙っておれ！」

いつもの笑い声を添えてではあったものの、状況的には正しいと思われるツッコミを入れた勇授を、真綿ちゃんは一喝して静めた。

そして一歩前に出て、春歌と名乗った先輩と対峙する。

「春歌とやら、いったいわらわになんの用なのじゃ？」

「そうですわねぇ……、それはまだ、秘密にしておいたほうが面白いでしょうか。あくまで今日は、ご挨拶に伺っただけですし」

真綿ちゃんが詰め寄るも、まったく怯むことなく、含み笑いを浮かべて答える春歌ちゃん。

「それでは、またお会いしましょう」

サラリと長く瑞々しい黒髪を揺らめかせながらきびすを返すと、彼女はふたりの前から優雅に歩き去っていった。

「おーっほっほっほっほっ！」

なんだかとっても堂に入った感じのおほほ笑いを響かせながら――。

ふむ。やっぱり「おほほ笑い」はするんだね。

4

「む〜……」
「真綿、どうしたの？　もとから変な顔が余計に歪んでるよ？」
「お……おぬし、ケンカを売っておるのかや！？」

朝っぱらから元気なふたり。
教室のいつもの席に座り、隣同士の真綿ちゃんと勇授くんがいつものごとく騒ぎ出す。

「にゃはははっ！　今日も元気に夫婦漫才開始だねっ！」
「ふふっ、さすがだわ」

そしていつもどおり、会話に加わってくる孝徳くんと紗月ちゃん。

「ちょ……、夫婦とか言うでない！　というか、なにがさすがなのじゃっ！？」
「あはははは。いつもの真綿に戻ったね」
「にゃはははっ！　相方が悩んでるみたいだと知って、勇授はわざと怒らせるようなことを言ったんだねっ！」
「ふふっ、さすがだわ」
「相方とか言うでない！　というか、勇授は普段からわらわが怒るようなことを平気で言っておるではないか！」

こんな感じでいつもどおりのバカ騒ぎを展開してはいるけど、孝徳くんが言ったように、今日の真綿ちゃんは明らかになにか思い悩んでいるみたいだった。
きっと、昨日の春歌ちゃんという三年生のことが、気になっていたのだろう。

でも、みんなのおかげで、こうして元気な姿に戻れた。
持つべきものは友達ということか。
若干、というかかなり、バカにされている感じではあったけど。

「あはははは。でも、やっぱり真綿は、そうやって元気にしてるほうがいいな」

にこっ。
ぱーっと周囲に薔薇の花でも咲きそうな笑顔で、勇授くんが言う。
……なんというか、鈍感な勇授くんに他意はないのだろうけど、それにしたってその言い方は……。

ぼっ！
瞬間的に顔を真っ赤にさせる真綿ちゃん。

「ななななに言っておるのじゃ、勇授は！　げげげげげ元気なわらわが、すすすす好きだなんてっ！」
「にゃはははっ！　そこまで言ってなかったけどね！」
「ふふっ、さすがだわ」
「あはははは」

今日も平和な四人であった。

「ところで、真綿ちゃんは、なにを悩んでいるのかしら？」

不意に紗月ちゃんが真顔になって尋ねる。
バカ騒ぎしてはいても、真綿ちゃんの心配はしていたみたいだね。
他の三人も、ピタリとはしゃぎ声を止め、真顔に変わっていた。

「……ちょっと、昨日気になることがあったのじゃ」
「あはははは。やっぱり気にしてたんだね」
ためらいがちに話し始めた真綿ちゃんに、笑い声をまじえてはいるけど真顔で言葉を添える勇授くん。
「ほほ～ぅ！　して、いったいなにがあったんだい？」
残りのふたりも身を乗り出し、真剣に聞く体勢を整える。
そして真綿ちゃんは、昨日あった出来事を話した。
「そんなことがあったのかぁ～。でも、三年生の先輩が真綿ちゃんに、いったいなんの用があるっていうんだろう？」
「さあ？　それはわからぬ。じゃが、向こうはわらわを知っているようじゃった。それに、なんかとても心に引っかかるというのかの、気になって仕方がないのじゃ……」
う～ん、と頭を悩ませる一同。
「それは……恋？」
ポツリと、紗月ちゃんがつぶやく。
「な……っ！？　バ……バカ、そういうのではない！　なにを言うのじゃ！　だいたい相手はおなごじゃぞ？　紗月はやっぱり、そっちの趣味が……」
「あはははは。そっちの趣味って、なんだろう？」
真綿ちゃんは真っ赤になって慌てた声を上げていた。
その様子を見て、いまいちよくわかっていない勇授くんがいつも

の笑い声を重ねる。

「ふふっ、冗談よ。それで、引っかかるって、どういう感じなの？」

ともかく、紗月ちゃんは話の流れを戻す。もっとも、話の流れを逸らしたのも、紗月ちゃん自身だったわけだけど。

「うむ、なんというかじゃな、こう、ずっと昔――そう、わらわが生まれるよりもずっと昔に、会っていたような気さえする、といった感じじゃろうか……」

一度冗談をまじえた会話を挟んだからか、真綿ちゃんは素直に胸のうちを語る。

「にゃはははっ！　真綿ちゃんは卑弥呼様の生まれ変わりだもんね～！　自称だけど」

「ふふっ。だからこそ、そう思い込んでいる、ということも考えられるかしら」

「じ……自称ではない！　本当に、わらわは女王卑弥呼の生まれ変わりなのじゃ！　それに、思い込みなどではない！　そりゃあ、なんとなくでしかないわけじゃが……。でも本当に、なんだかこう、胸の辺りがもやもやする感じなのじゃ！」

素直に語ったというのに、あまりまともに取り合ってくれていない返事を受け、真綿ちゃんは憤慨する。

「あははは。真綿の真っ平らな胸が大きくなる前兆なのかな？　なんてこと、あるわけないね。あははは」

ドゲシッ！　ガシッ！　バキッ！　メキョッ！

勇授くんはやっぱり、学習能力ゼロのようだ。
むこうずねへのつま先蹴り、顔面へのひじ打ち、みぞおちへのひざ蹴り、脳天へのチョップ。
最後のは若干、クリーンヒットを通り越しているような音だったけど。……大丈夫だろうか？

「にゃはははっ！　相変わらずふたりは仲がいいな～！」

それを見て、孝徳くんが笑いながら茶化す。
足もとに勇授くんがうずくまって転がっている状況のまま。

「ふふっ。でも、心配ごとがあるのは、よくわかったわ。なにかあったら、いつでも相談に乗るからね」
「……うむ、よろしく頼むのじゃ」

といったところでチャイムが鳴り、担任のみつき先生が教室に入ってくる。

「きり～つ、きをつけ～、礼～……」

日直の声でクラスのみんなが立って、礼をする中、唯一勇授くんだけが、まだ立ち上がれないままうずくまっていた。
ま、勇授くんのことだから、すぐに復活するだろうけど。

「……おい、大丈夫かや？」

さすがに床にうずくまったままの勇授くんが心配になったのか、椅子に座った真綿ちゃんが声をかける。

「うん、なんとか……」

顔を上げた勇授くんは、チラリと視線をある一点に向け、

「あはははは」

いつもの笑い声を上げた。

「なにを笑っておるのじゃ、気持ち悪い」

「だってこの位置からだと、真綿のパンツ丸見えだから」

ゲシッ！　ゲシッ！　ゲシッ！　ゲシッ！

……あ、勇授くん、今度こそ再起不能になるかも……。くわばらくわばら。

5

放課後となり、真綿ちゃんはいつもどおり、勇授くんとふたりで通学路を歩いていた。

ふたりの家は学校から結構遠い。校門から出てすぐの場所だとたくさんの生徒たちが歩いているけど、家が近づくにつれて学生の姿は徐々に少なくなっていく。

その代わりに、駅前商店街が近くなる分、買い物帰りの主婦だとかが増えてくるのだけど。

そんな通学路も、時間と偶然の産物として、たまにぱったりと人通りが途絶えたりすることがある。

今がまさにそのときのようで、真綿ちゃんと勇授くんの周りには、人っ子ひとり見えなくなっていた。

「む～……」

「真綿、まだ悩んでるの？　ブサイクな顔が余計にひどくなってるよ？」

「お……おぬし、絶対にケンカを売っておるじゃろう！？」

いつもながらの怒鳴り声を響かせる真綿ちゃんだったけど、すぐに、

「む～……」

と、再びうなり声を上げ、勇授くんいわくブサイクな顔へと逆戻りするのだった。

「あはははは。真綿、そんなブサイクな顔して歩いてると、みにく

いもの見せるな～とか言って変質者に殺されちゃうかもしれないよ？」

学習能力のない勇授くんは、またしても真綿ちゃんの逆鱗に触れるようなことを口走る。

でも、このときばかりは、真綿ちゃんの反応も違っていたようだ。

「殺される……。あ……、それじゃ！　そうじゃった……、うむ、間違いないぞよ！」

「？？？？？」

なにやら、謎はすべて解けた！　とでも言わんばかりの納得顔を浮かべている真綿ちゃんと、疑問符を浮かべまくっている勇授くん。

「勇授よ、わらわは思い出したのじゃ！　過去の……、忌まわしい事件を！」

☆☆☆☆☆

真綿ちゃんは、女王卑弥呼の生まれ変わりだ。

それは今までにも真綿ちゃん自身が何度も言っていた。

はたしてそれが真実なのか否かは、この際置いておくとしよう。

ともかく真綿ちゃんは、その卑弥呼だった頃の記憶を取り戻したというのだ。

もし本当にそうなら、日本の歴史にとってはものすごい大発見ということになるだろうけど。

ただ、どうやら彼女が思い出したのは、ごく一部だけらしい。

その一部の思い出したこと、というのが――。

「女王卑弥呼だったわらわは……、家臣のひとりに、裏切られて、そして……、こ……殺されたのじゃ……。就寝中に忍び込まれ、そのまま……」

「……」

さすがの勇授くんも、いつもの笑い声を漏らすことすら忘れ、真綿ちゃんの言葉を頭の中で反芻しているようだった。

「おーっほっほっほ！　ようやく、思い出しましたのね！」

唐突に、高らかな笑い声が響く。

この声は……。

「蘇我春歌！」

そう、昨日も声をかけてきた三年生、春歌ちゃんだった。

それにしても真綿ちゃん、仮にも先輩である彼女に対して、フルネームの呼び捨てだなんて。

真綿ちゃんらしいといえばらしいのだけど。

「そうですわ！　そして、邪馬台国であなたに仕えていた家臣の生まれ変わりでもあるのです！」

そんな真綿ちゃんの態度を意に介することもなく、春歌ちゃんはそう言ってのける。

「な……なんじゃと！？　そうすると、あのときわらわを裏切り、寝首をかいたのは、おぬしじゃったというのかや！？」

「おーっほっほっほ、そうですわね。もっとも、生まれ変わる前のことですから、あたし自身ではないですけれど。この歳で殺人犯になんてなりたくないですし」

あっさりと認める春歌ちゃん。

はるか昔、女王卑弥呼を裏切って殺した人物。その生まれ変わりと称するこの三年生が、いったいどうして真綿ちゃんに近づいてきたのか。

いまいち理解できないところだ。

そんな話を知られたら、生まれ変わる前のことだとはいえ、逆に真綿ちゃんから恨まれてしまう危険性だってあるだろうに。

それとも、その当時と同じように、真綿ちゃんを殺すと宣言でもするつもりなのだろうか？

……というようなことを、どうやら勇授くんも考えていたようだ。

「真綿ちゃんを……殺すつもりなの？」

普段は見せないような真面目な険しい顔で春歌ちゃんを睨みつけながら、疑問をぶつける。

勇授くんはさりげなく、真綿ちゃんを守るように、自分の身を春歌ちゃんとのあいだに滑り込ませる。

頼りがいがあるかどうかは微妙なところだけど、彼女を守るナイト様、といったところか。

でも春歌ちゃんは、勇授くんの言葉を軽く一笑にふす。

「ほほほ、殺人犯になんてなりたくないと、先ほども申し上げましたわよ？　それに、そんな野蛮なマネ、このあたしがするとでも思うのですか？」

「じゃ……じゃあ、いったいなにをしに、わらわの前にのこのこ

現れたというのじゃ！？」

真綿ちゃんは間髪を入れず、大声を張り上げて彼女に怒鳴りつける。

いくら生まれ変わる前、ずっと昔の出来事とはいえ、家臣に裏切られて殺されたことを思い出したというだけでも、相当なショックだったはずだ。

ましてや、間違いないとまで言いきって納得顔だった真綿ちゃんなのだから、殺されたときのやり取りや、もしかしたら息絶えるまでの苦しみまでも思い出してしまったのかもしれない。

そんな状況であれば、自分を殺した張本人に対して怒りの念を持ってしまうのも当然と言えるのかもしれない。

ただ、その声があまりに大きくなっていたからというのもあり、周囲には人が集まり出していた。

「おほほほほ、騒がしくなりそうですので、今日はこれくらいで引き下がらせてもらいますわね。では、ごきげんよう」

涼しい顔でそう言い残すと、春歌ちゃんは長いストレートの黒髪を揺らしながら去っていった。

あとには唖然とした顔の勇授くんと真綿ちゃんが取り残され、そんなふたりには通りがかりの人から不思議そうな視線が向けられていた。

6

次の日、真綿ちゃんは昨日のことを、言われていたとおりみんなに相談した。

みんなといっても当然ながら、孝徳くんと紗月ちゃんのふたりなのだけど。

移動教室の多い日だったため、なかなか話す機会が持てなかったものの、どうにか昼休みに話し始めたところで、真綿ちゃんのいつにない真剣さに気づくいつもの面々。

茶化したりもせず、真綿ちゃんの話を少し聞き始めた段階で、紗月ちゃんはこうつぶやいた。

「これは、じっくり腰を据えて話し合ったほうがよさそうね。学校だと、その春歌さんっていう先輩が聞いているかもしれないわ。本人じゃなくても、仲間の人にスパイさせる可能性だってありえるし……」

「うん、そうだねっ。よっし、それじゃあ放課後、みんなで勇授の家に行って作戦会議だ！」

「あははは。どうしてぼくの家なんだろう～？　ま、いいけどね」

孝徳くんの提案、というか強制にも、勇授くんはいつもの笑い声を返すだけだった。

☆☆☆☆☆

辺りに視線を巡らせ、警戒しながら通学路を歩く、怪しい四人組。

ま、学ランとセーラー服に身を包んでいるのだから、さほど目立ったりはしないだろう。
もっとも、真綿ちゃんが口を開いたら、目立ってしまうのは免れない。
それはみんなもわかっていて、勇授くんの家に着くまで喋らないよう、彼女に念を押していた。

ちなみに、喋ったら一回ごとに一枚ずつ問答無用で服を脱がす、と紗月ちゃんが勝手にルールを決めていた。
さすがに文句を言う真綿ちゃんだったけど、紗月ちゃんは容赦ない。
今からスタートよ、と彼女が宣言すると、真綿ちゃんもしぶしぶながら口を閉じた。
いくら真綿ちゃんといえども、どうやら紗月ちゃんが本気らしいということは、その鋭い目を見てわかったようだ。
勇授くんだけは、わかっているのかいないのか、いつもどおり笑っているだけだったけど。

いつもと比べるとかなり静かな下校風景。
ただ、真綿ちゃんが口を閉ざしていても、今日は勇授くんの他に、孝徳くんと紗月ちゃんもいる。
というわけで、警戒しながらも、三人はお喋りしつつの下校となっていた。

「昨日はこの辺りで、春歌さんって人に会ったのよね？」

こくん。
質問されても、律儀に言われたことを守って、返事は首を縦に振るだけの真綿ちゃん。
もし喋ってしまったら、紗月ちゃんのことだし、「ふふっ、誘導

尋問にかかったわね」とか言って、約束どおり服を脱がしにかかるかもしれない、などと考えているだろう。

「ちっ……」

なにやら紗月ちゃんが小さく舌打ちする音が聞こえたような気もしたけど、聞かなかったことにしておこう。

「にゃはははっ！　でも、ほんとなのかなあ？」
「う～ん。どうだろうねぇ」
「ほら、今ここで話すのも危険かもしれないんだから。勇授くんの家に急ぎましょう」

自分から話題を振ったはずなのに、そうのたまう紗月ちゃんに、はいはい、わかりました、と服従の声を発する男子二名。

いつもは激しくうるさい真綿ちゃんの陰に隠れて目立たないけど、やっぱり紗月ちゃんも結構な女王様的立ち位置にいるのかもしれない。

☆☆☆☆☆

「みなさん、いらっしゃいませです。お兄ちゃんのお友達と、恋人と、愛人の方ですか？」

お菓子類が盛りつけられたお皿と全員分のティーカップを乗せた大きなトレイを両手に抱えながら、女の子が勇授くんの部屋に入ってきた。

この子は、勇授くんの妹だ。
唯夢（ゆいむ）という名前で、小学校四年生。メロンをかたどった飾りがついたゴムで髪を束ね、サイドテールにしている。子供らしくて可愛らしい印象の女の子だ。
でも、いきなりのその発言はどうかと思うのだけど……。

「あはははは。唯夢、そんなんじゃないよ。この人たちは、ぼくのご主人様と悪友ふたりだから」

対する勇授くんも、なかなかに失礼な言葉で返答する。

「あはっ。お兄ちゃん、なんか、え～っと、学校生活だいじょーぶですか？　ゆいむ、これでつかみはオッケーって思って、あんなふうに言っただけだったのに……」

……どうやら勇授くんと違って、なかなかしっかりした妹のようだ。

「ふふっ、唯夢ちゃん。お紅茶とお菓子、持ってきてくれてありがとう。それにしてもあなた、なかなかやるわね」
「いえいえ、そんなことないですよ、愛人の方」

紗月ちゃんの言葉にも、微かに「にまっ」とした笑みを浮かべて答える唯夢ちゃん。
それを聞いた孝徳くんは、面白がってこんなことを言い出した。

「にゃははははっ！　愛人は紗月ちゃんのほうか！　とすると、真綿ちゃんが恋人に認定された、ってことだよねっ！」

もちろん真綿ちゃんに視線を向けながら。

「なぬ！？　そそそそそんなこと……！　わ……わらわは、べつに勇授とはそういう関係では、ないのだぞよ！？」

予想どおりというか、思惑どおりというか、真綿ちゃんは焦りの表情をありありと浮かべて否定する。

「そういう関係って、どういう関係ですか～？　ゆいむ、わからないです～。教えてください、恋人のお姉ちゃん～」

「むむむ！？　いやその、じゃな、つまり、そういう関係というのはじゃな……」

すかさず繰り出された唯夢ちゃんからの質問に、真綿ちゃんは真っ赤になりながら、はっきりしない言葉をもごもごと繰り返していた。

からかわれてるというのに、まったく気づいていないのだろう。

それにしてもこの唯夢ちゃんって子、かなり小悪魔入っているようだ。将来が若干心配かもしれない。

「あははは。こら唯夢、ぼくのご主人様をいじめちゃダメでしょ？」

「はぁ～い。それじゃ、ゆいむは退散しますね。みなさん、ごゆっくり～！」

勇授くんがさすがに見かねたのか、妹をたしなめると、唯夢ちゃんは明るい笑顔を振りまきながら部屋をあとにした。

☆☆☆☆☆

「……ま、そろそろ本題に入りましょう」

紗月ちゃんの宣言で、本来の目的――作戦会議が開始されることになった。

もっとも、すでにかなり時間が経ったあとではあったのだけど。

唯夢ちゃんが持ってきた紅茶とお菓子も、すべてなくなっているし。

ともなく、あまり遅くなるのも問題だと思ったのか、みんなはかなり足早に作戦を立てていく。

「春歌さんって先輩、裏切られた家臣の生まれ変わりって言ってるってことは、かなり危険そうよね」

「そうだね、わざわざ向こうから真綿ちゃんに声をかけてきたわけだし！」

「やっぱり気をつけるべきだわ。もっと慎重にならないと……。そうね、これからは、なるべくみんなで一緒に行動するようにしましょう」

「学校の行き帰りも、ちゃんと守らないとだねっ。それじゃ、おいらと紗月ちゃんも毎朝真綿ちゃんを迎えに来て、帰りも家まで送ることにしよう！」

「それがいいわ。そうしましょう」

「勇授は今までも一緒だったけど、これまで以上にしっかりエスコートするようになっ！」

「あはははは」

「なるべくくっついて歩いたほうがいいね！　腕を組むとかさっ！」

「そそそそ、そうじゃの！」

「あはははは」

主に紗月ちゃんと孝徳くんのふたりで、話はどんどんと進められていた。

真綿ちゃんも自分を守ると言ってくれているからなのか、珍しく否定の言葉を挟んだりもせず、素直に受け入れているようだった。

……若干、というかかなり、真っ赤になっているようにも見えたけど。

勇授くんと腕を組んで登校というのが、やっぱり嬉しくも恥ずかしいのだろう。

そして対する勇授くんはいつもどおり、笑っているだけ。

もちろん幼い頃に真綿ちゃんのお母さんに言われたことを忠実に守っている、とも言えるわけだけど。……それよりも単純に、勇授くんの性格、というだけな気がする。

そんなこんなで、さくっと作戦会議は終わりを告げたのだった。

1

ひそひそひそ……。

校舎内のとある一角、人なんてまず通らないこの場所で、なにやらひそひそと話し合う声が微かに響いていた。

屋上へと出るためのドアは、安全上の理由から普段はカギがかけられ、閉めきられている。

だから階段を上った先にあるそのドアの前のスペースは、隠れてなにかするには絶好の場所と言えるのだ。

時間は昼休み。

素早く給食を食べ終えた四人の生徒たちが、いそいそとこの場所に身を潜めた。

もちろんそれは、真綿ちゃん、勇授くん、孝徳くん、紗月ちゃんの四人だった。

「わらわはあのあと、いろいろと調べさせてみたのじゃ」

いつもは大声で喋る真綿ちゃんも、さすがに他の三人の雰囲気に呑まれているのか、ひそひそと小声でそう言った。

彼女がそれを最初に教室で切り出したとき、紗月ちゃんが素早く場所を変えようと提案した。昨日の作戦会議で決めたとおり、慎重になっているからだろう。

そこで、四人はこの場所までやってきていたのだ。

「調べさせた？　真綿ちゃんって、ご両親と三人暮らしのはずだよね？　もしかしてご両親にまで命令とかしてるの？」

「あははは。真綿の家は大金持ちだから。お手伝いさんとかもいるんだよ」

孝徳くんの疑問に、勇授くんが答える。
だけど普通、お手伝いさんというのは家事なんかを手伝うものだと思うのだけど。

「ともかくじゃな、調べさせた結果が、さっきメールで届いたのじゃ」
「ふふっ、ケータイの持ち込みは禁止されてるのに、校則違反も怖れないなんて。さすがね」
「あはははは。でもほとんどみんな、持ってきてない？」
「にゃはははっ。持ってる人は、だいたいそうかもだね～。具体的に言うと勇授以外全員？」
「あはははは」
「話の腰を折るでない。ともかくじゃの、これがそのメールなのじゃが……」

真綿ちゃんは意外なほど可愛いデザインの携帯電話の液晶画面をみんなに見せる。

差出人　：　ガロ

件名　：　調査結果

メール本文　：

先日頼まれた調査の結果について報告します。

史実にあるとおり、大化の改新の引き金となった乙巳（いっし）の変にて、

中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）が中臣鎌足（なかとみのかまたり）とともに蘇我入鹿（そがのいるか）を暗殺しましたが、どうやらそれには裏があったようです。

中大兄皇子は女王卑弥呼の子孫、
そして蘇我入鹿は卑弥呼を暗殺した家臣の子孫だったのです。

どうやら、先祖の記憶が残ったまま生まれてしまうことがごく稀にですがあるようで、
このときの中大兄皇子と蘇我入鹿もそうだったと、ある筋から情報を得ました。

卑弥呼の記憶に影響された中大兄皇子が、自分を殺した家臣の子孫である蘇我入鹿に
恨みの念を募らせ、そして暗殺にまで至った。

それがこの事件の真相だったらしいのです。

「にゃははっ、真綿ちゃん、いったいなにを調べさせてたの……？」
「黙って続きを読むのじゃ」

突然日本史の授業で出てくるような名前を目にして思わず疑問を口にした孝徳くんを、真綿ちゃんは素早く一喝し、メールの続きを見せる。

真綿さんは女王卑弥呼の生まれ変わりだと言っていますが、
それはこのときの中大兄皇子と同じ状況なのかもしれません。

なぜなら真綿さんは、中大兄皇子の子孫にあたる家系だからです。

それは中野、という名字からも、その痕跡がうかがえると思います。

また、中臣鎌足、すなわちのちの藤原鎌足の子孫にあたるのが、藤原勇授くんのようですし、さらに暗殺された蘇我入鹿の子孫が、

真綿さんの前に現れたという、蘇我春歌さんのようです。

春歌さんという人が女王卑弥呼の家臣の生まれ変わりだと言っているのならば、

さらにこの辺りの記憶も残っているということが考えられます。

そうであれば、恨みの念を持っていたとしても不思議ではないでしょう。

記憶が完全に残っていなかったとしても、潜在意識の中で無意識のうちに

影響を与えてしまう、つまり、なんとなく真綿さんを見て、理由もわからずに

怒りが湧き上がってくる、といったこともあるかもしれません。

こちらで調査は続行しますが、くれぐれも気をつけてください。

「……というわけなのじゃ」

「う〜ん……。これって、本当なのかしら?」

さすがに信じられない、といった様子で、紗月ちゃんが眉をしか

めている。
それも当然だろう。
大化の改新に関わった歴史上の人物が真綿ちゃんたちの先祖で、その過去の記憶を引きずって恨まれているのかもしれない、だなんて。

「どうじゃろうのぉ。わらわにもわからぬ。じゃが、ガロの調査の腕は確かなはずじゃ」
「そのガロって人は、お手伝いさんなの？」

真綿ちゃんの言葉に、孝徳くんは再び疑問をぶつけた。

「ん……、まぁ、そんなもんじゃ。わらわのことを、ずっと可愛がってくれておる」

いまいちはっきりしない受け答えだったものの、今はそんなことを気にしている場合でもないだろう。

「とにかく、追加の調査結果を待ちつつ、今まで以上に慎重に行動する必要がありそうね」

紗月ちゃんが結論をまとめ、みんなが黙って頷くのと同時に、昼休み終了五分前を知らせる予鈴が鳴り響いた。

2

ひそひそひそ……。

放課後となり、真綿ちゃんたち四人は、再び屋上へと出るドアの前に集まっていた。

追加情報のメールが届いたという真綿ちゃんの報告により、紗月ちゃんが先導してみんなを連れてきたのだ。

「それで、追加情報っていうのは？」

「うむ。これじゃ」

昼休みと同様、携帯電話の画面を見せる真綿ちゃん。

差出人：ガロ

件名：調査結果2

メール本文：

追加でわかった情報がありましたので、お知らせします。

真綿さんのご友人、天童孝徳さんについてです。

彼はどうやら、蘇我入鹿が暗殺されたあとに即位した孝徳（こうとく）天皇の血筋を

受け継いでいるようです。

かなり遠い血筋にあたるようで、すでに天皇家とはまったく関

係がないと
言っていいと思いますが。
ただご先祖からの伝承などでも残っているのか、彼の家系では、長男に孝徳（たかのり）という名前をつけることが多いようです。
それでは、引き続き調査を続行します。

「にゃははっ、おいらの家って天皇の血筋だったのか！」
嬉しそうに言う孝徳くんだったけど、
「遠くてもう全然関係ないって、書いてあったけどね」
紗月ちゃんから冷静なツッコミを入れられていた。
「あははは。でも、今回の情報はこれだけなんだね」
「そうみたいじゃの。まったく役に立たない情報じゃ」
「うあっ、ひっどいなぁ……」
「実際、まったく役に立たないしね、孝徳くん」
「おいら本人が！？」

若干気が抜けてきているのか、大声とはいかないまでも、みんなそれなりの声で喋るようになっていた。
ま、今は聞かれて困るような話をしているわけでもないから、べつに構わないとは思うけど。
そこは微妙に真面目な紗月ちゃん。すかさず叱責の声をぶつけてくる。

「声が大きいわよ、孝徳くん。気をつけなきゃダメじゃない。まったく孝徳くんは、いつもいつも……」
「おいらだけ!?　しかも、いつもって、おいらってどんなふうに見られてるのさ?」
「ふふっ、ダメ男?」
「うあっ、直球っ!?」
「あはははは。相変わらずふたりは仲よしだな〜」
「いえいえ、そちらのおふたりほどじゃないわ」

「ちょっと待ってよ!　おいらと紗月ちゃんの、どこが仲よしだってのさ!?」「ちょっと待て!　わらわと勇授の、どこが仲よしだと言うのじゃ!?」

申し合わせたかのうように孝徳くんと真綿ちゃんの声が重なる。
紗月ちゃんの叱責から始まった流れも、結局はこうしていつものバカ騒ぎへと発展する結果にしかならなかったようだ。
とはいえ、紗月ちゃん自身も、それでいいというふうに、笑顔を浮かべていた。

慎重になったほうがいい状況ではあっても、度が過ぎると精神的にまいってしまう。
だからこうして、みんなでバカ騒ぎする時間も必要だと考えているのだろう。

「それはともかく、真綿ちゃん。他に最近気になったこととかって、ないの?」

ひとしきりバカ騒ぎが静まったところで、紗月ちゃんが問いかけた。
もう少ししっかりと現状を把握しておこうとでも考えたのだろう

か。

「う〜ん、そうじゃのぉ……。気になるといえば、最近ちょっと、おかしな視線を感じるような気がするのじゃ」

「あの春歌って三年生が隠れて見てるってことかな？」

答える真綿ちゃんの声に、孝徳くんが意見を添える。

確かにそれが一番ありえそうではあるけど、真綿ちゃんはかぶりを振る。

「う〜む……、なんとなくじゃが、違うような気がするのぉ。もっと別の、鋭い視線というか……。もちろん、わらわの気のせいかもしれないわけじゃが……」

どうやら彼女自身も、はっきりと確信できているわけではないようだ。

「なんにしても、やっぱり注意する必要はありそうね。さて、それじゃ、帰りましょう」

昼休みと同じように紗月ちゃんが締めの言葉を放つと、四人は家路へと就いた。

もちろん真綿ちゃんの家まで送っていってから、残りの三人は自分の家に帰ることになるのだけど。

勇授くんは真綿ちゃんの隣の家だからいいけど、孝徳くんと紗月ちゃんの家は学校から見て完全に反対側だから、毎度ながら大変だ。

3

真綿ちゃんを家まで送る帰り道。
四人の学生が横に並んで歩いていた。
と、その目の前に立ち塞がる人影……。

「……出おったな、蘇我春歌！」
「おーっほっほっほ！　人をバケモノかなにかみたいに、言わないでくださいますか？」

それはもちろん、三年生の春歌ちゃんだった。
彼女はいつもどおりのおほほ笑いを披露すると、不満を唱える。

「……似たようなものじゃろう」

ぼそっとつぶやく真綿ちゃん。

「なにか言いまして？」
「いや、なにも言ってないぞよ」
「そうですか。それにしても、今日はあまりにも遅いので、待ちくたびれてしまいましたわ」
「おぬしはずっと待ち伏せしておったのか？　暇な奴じゃのぉ」
「う……うるさいですわ！　あたしには崇高な目的があるのですから、そのためならたとえ何時間でも待つのですわ！」

顔を合わせて早々、言い争いに発展するこのふたり。
仲が悪いというか、馬が合わないということになるだろうけど、頭の作りは同レベルだと言わざるを得ない。

そんなふたりの様子を、黙って観察していた残りの三人。
勇授くんは以前にも春歌ちゃんと会っているけど、孝徳くんと紗月ちゃんは初顔合わせだ。
話には聞いていたわけだけど、かなり不穏なイメージしか持っていなかったはずだから、慎重に様子を見ていたのだろう。

「あなたが春歌さんですか。話には聞いています。ですが、どの時代のことを言っているにしろ、過去の記憶――過去に死んだ人の記憶に引きずられて真綿ちゃんを恨むなんて、筋違いだと思うのですが」

慎重に言葉を選び、紗月ちゃんがふたりの言い争いに割って入る。
仮にも同じ中学の先輩だから、敬語を使って余計な波風を立てないようにしているのも、冷静な彼女ならではと言える。
同じ中二の女の子でも、やっぱり真綿ちゃんとは大違いだ。

「おほほほほ、真綿さんのお友達に、こんなまともな方がいるなんて、驚きですわね～。それで、そちらの方――え～っと……」
「山本紗月です」
「そう、紗月さん、あなたの質問に、お答えいたしますわね。こんなおバカさんと言い争いをしていても、埒が明きませんし」
「おバカさんとはなんじゃ！　わらわは頭脳明晰、容姿端麗なパーフェクトな女じゃ！」
「にゃははっ！　そう言いきれる真綿ちゃんはすごいなぁ、その頭と見た目で！」
「ちょっと待て！　孝徳、どういうことじゃそれは!?」

春歌ちゃんが話し始めようとしているのに、周りではいつものバカ騒ぎが展開されていた。
真綿ちゃんがいたら、それも当然なのかもしれないけど。

でも、さすがにそんなバカ騒ぎをしていたら、人も集まってきてしまうというもので。
辺りにはちらほらと人が集まり、なにを騒いでるんだ？　と心配そうな視線を向けられ始めていた。

「おほほほほ、さすがにこれでは、落ち着いてお話もできませんわね。場所を変えましょう」
「……そうですね。ほらみんな、行くわよ」

春歌ちゃんの提案に頷くと、紗月ちゃんは他の三人を引き連れ、それに続いていった。

☆☆☆☆☆

「……それで、わたしの質問に答えてくれるんですよね？」

いつものメンバーに春歌ちゃんを加えた五人は、近くの公園に入っていた。
これといってなにもない、桜もほとんど散り終えたあとの公園ということで、人の姿はほとんど見られない。

「そうですわね」

春歌ちゃんはある程度の間合いを取り、紗月ちゃんの正面に立っている。
鋭い目つきで睨まれながらも、まったく怯む様子はない。
紗月ちゃんの背後には真綿ちゃんが守られるように立っている。

そして真綿ちゃんの左右には勇授くんと孝徳くんが控える。
そんな中、春歌ちゃんは語り始めた。

「あなたは真綿さんを恨むのは筋違いだと言いました。ですが、いったいどうしてそう言えるのですか？」
「え？」

紗月ちゃんを睨み返しながら、春歌ちゃんは若干怒りを含んだような声をぶつける。
その、静かながらも強烈な威圧感に、さすがの紗月ちゃんでさえも戸惑いを隠せない。

「当事者でもないあなたが、どうしてそんなことを言えるのかと、訊いているのです。この心の底から湧き上がってくる積年の恨みは、たとえ輪廻転生を繰り返したとしても消えはしないのですよ」
「それじゃあやっぱり、真綿ちゃんを恨んでるのは確かなんですね？」
「そうですわ。あたしにとって、真綿さんは長年恨み続けてきた対象。つい先日まではその記憶もぼやけたものでしたが、今は完全に思い出しました。もうあと戻りはできないのですわ！」

大声を張り上げる春歌ちゃんに、真綿ちゃんを取り囲む三人は身構える。

「どうしてじゃ！？　もともとわらわを――女王卑弥呼を殺したのはおぬしじゃろう！？　その時点で、恨みは晴らしたということになるのではないか！？」

ここで、今まで黙っていた真綿ちゃんが、春歌ちゃんに負けないほどの大声で怒鳴り返した。

「おーっほっほっほ。確かにその時点ではそうかもしれませんね。でも、そのあとはどうですか？」
「ど……どういうことじゃ！？」
「もう調べてわかっているんじゃありませんこと？　まぁ、いいでしょう。お話致します。あたしは卑弥呼を殺した家臣の子孫でもありますが、大化の改新で暗殺された蘇我入鹿の子孫でもあるのです。そして蘇我入鹿を殺したのが、あなたの祖先、中大兄皇子なのですわ！　あたしはその恨みを晴らすべく、こうしてここに来ておりますの！」

ザッ！
足を踏みしめ、構えを取る春歌ちゃん。
それは素人目にも、戦い慣れした隙のない構えのように思えた。

「じゃが、それよりも前に卑弥呼を殺したのは、そちらのほうじゃろう！？」
「問答無用です！」

叫び声とともに、春歌ちゃんは地面を蹴った。

4

真正面に向き合って立っていた紗月ちゃんを避けるように一旦斜め前に移動、そこからさらに地面を蹴って斜めに切り込むように飛ぶ春歌ちゃん。

そして彼女はそのまま足を伸ばし、飛び蹴りの体勢を形作る。

とっさに動いたのは勇授くんだ。

真綿ちゃんの前に身を挺し、彼女を庇うように身構える。

と、その目の前に、割り込んでくる影があった。

ガシッ！

襲いかかってきた春歌ちゃんの蹴りを、両腕をクロスさせて受け止める。

それは孝徳くんだった。

「ここは、おいらに任せて！」

「おーっほっほっほ！　あたしの邪魔をするなんて、おバカな人ですわね～。お望みどおり、あなたから始末して差し上げますわ！」

睨み合うふたり。

真綿ちゃんを背後に庇う勇授くんは、そのままじりじりと下がって距離を取る。もちろん背後の真綿ちゃんもそれに合わせてあとずさりする。

紗月ちゃんのほうも、すでに距離を取っていた。春歌ちゃんと孝徳くんから少し離れた地面に、座り込んでいる。

……いや、距離を取ったのではなくて、逃げていただけみたいだ。

完全に腰を抜かしているようだし。

冷静に言い合ってはいたものの、彼女は口先担当だった、ということか。
もしかすると孝徳くんが飛び出したのは、そんな彼女を守るため、という理由もあったのかもしれない。

そんな孝徳くんに、春歌ちゃんが襲いかかる。
手やひじを使った打撃技に、蹴り、ひざ蹴りなどをまじえ、隙あらば組みついて投げ技に持っていく構え。
打撃や蹴りを腕でどうにかガードし、組みついてくる隙は与えずに、素早く間合いを取る。

一進一退の攻防が繰り広げられていた。

戦い慣れした雰囲気をかもし出す春歌ちゃんに対して、孝徳くんはいまいち頼りない印象。
たまに足もとをふらつかせたりしながらも、どうにか攻撃をしのいでいる。
機会をうかがい、ときおり反撃に打って出るものの、それらはあっさりと受け止められてしまう。

明らかに孝徳くんが不利。
そう思える状況ではあった。
でも、どういうわけか決着はつくことなく、時間だけが流れる。

「おーっほっほっほ！　すぐに沈めて差し上げるつもりでしたが、なかなかやりますわね。ですが、足がふらついていますわよ」
「にゃははっ！　そう見えるだけだよ！　……おいらは素早さが売りなんだからねっ！　……はぁ、はぁ」

あれだけ動いたのに涼しそうな顔で笑い声を響かせている春歌ち

ゃん。
それに対して彼女に答える孝徳くんのほうは、息も上がって苦しそうだ。
「……春歌さんは、どうやら武術の心得があるみたいだね。しっかりとした隙のない構えと動きだ」
ポツリと、勇授くんがつぶやく。
思えば彼はさっきから――春歌さんが通学路で目の前に立ち塞がってから、ずっと黙っていた。
どうやら彼女の様子をじっとうかがっていたようだ。
勇授くんの家は、昔、道場を開いていた。
彼の父親は、藤原流の拳法の使い手だったのだ。
そして勇授くんは、そんな父親に幼い頃からしごかれ、その藤原流拳法を身につけていた。
もっとも、のほほんとした勇授くんが、そんな拳法を実際に使うことなんて、ほとんどないのだけど。
ちなみに、安い料金で指導することをうたい文句としていたためか、父親の道場はつぶれ、かなりの借金が残ったらしい。
それを支えたのが、真綿ちゃんの両親だったというのだから、その子供である勇授くんが真綿ちゃんに頭が上がらないのも、当然の流れだったのかもしれない。
……ま、勇授くんと真綿ちゃんの場合、本人たちの性格のせい、という要素のほうが大きいような気がするけど。
と、それはともかく。
真綿ちゃんは勇授くんのつぶやきを聞き、質問を返した。

「孝徳のほうは、どうなのじゃ？」
「ん……全然なってないね、あれは。ど素人だよ」
返ってきた答えに、真綿ちゃんは青ざめる。
「そ……それじゃあ、マズいのではないか！？」
彼女の言葉どおりに、事態は悪いほうへと流れる。
孝徳くんが足をもつれさせ、地面に尻餅をついたのだ。
その目の前に、勝ち誇ったような表情の春歌ちゃんが立つ。
「よく頑張りました。でも、ここまでですわね。さあ、覚悟なさい！」
余裕の笑みすら浮かべながら、最後の一撃を加えようと春歌ちゃんが動きを見せた、そのとき。
「孝徳！」
真綿ちゃんが突然飛び出した。
勇授くんが止める隙もなく、彼女は孝徳くんに駆け寄ろうとする。
それを見た春歌ちゃんは、あっさりとその標的を変えた。
もちろん——真綿ちゃんのほうへ！
もともと春歌ちゃんのターゲットは彼女なのだ。それも当たり前だろう。
さすがにとっさの判断だったからか中途半端な形ではあったけど、真綿ちゃんに体当たりをかます春歌ちゃん。
小柄な真綿ちゃんの体は、成すすべもなく吹き飛ばされてしまう。

春歌ちゃんは追撃の構えに入ろうとしたものの、すぐにその動きを止めることになる。
倒れていた孝徳くんが彼女の足にしがみついたからだ。
春歌ちゃんは、飛びかかろうとしていた勢いで、派手な音を立てながら転倒する。

一方、吹き飛ばされた真綿ちゃんは、勇授くんがしっかりと受け止めていた。

「くっ、この……、痛っ……！」

すぐに立ち上がって孝徳くんに反撃を加えようとはしたのだろう。
だけど、その春歌ちゃんの顔が歪む。
どうやら孝徳くんにしがみつかれて転ばされたときに、足を痛めてしまったようだ。

「……お……覚えてなさい！」

彼女の状況判断は迅速だった。
素早く身を翻すと、春歌ちゃんは少し足を引きずるようにしながらも、公園から飛び出していく。
孝徳くんと紗月ちゃんのふたりは地面に倒れたまま、そして勇授くんは、両腕で真綿ちゃんのことを抱きとめたまま、春歌ちゃんが逃げていくのを黙って見送った。

「真綿、大丈夫？」

真綿ちゃんのすぐ目の前から、勇授くんの気遣いの声が響く。
気遣い、だけでなく、彼の息遣いも感じられる、そんな間近な距離だ。

抱きとめられているのだから、それも当然なのだけど。

「あ……ありがとう。褒めてつかわすぞよ」

真っ赤になりながらも、真綿ちゃんはそう言って勇授くんにしがみつく。

「あはははは。でも、褒めるなら孝徳のほうでしょ」

対する勇授くんのほうは、いつもどおりの笑い声を返すだけだった。

5

翌日の土曜日、いつものメンバーが勇授くんの部屋に集結していた。

昨日の春歌ちゃんの襲撃で、真綿ちゃんはさすがに沈んだ表情になっていた。

自分がいたからあんなことになった、そんなふうに責任を感じているようだった。彼女らしくないとは思うけど。

土日と休みになるから、せめて外に連れ出して気を紛らわせてあげよう。

というわけで、紗月ちゃんが提案してこうして集まってきたいつものメンバー。

もちろん、家に閉じこもっているよりも、危険は増えてしまうことになる。

でも、真綿ちゃんは部屋にこもっていたら気が滅入って潰れてしまいそうなほど沈み込んでいた。

それを感じ取って、紗月ちゃんは召集の提案をしたのだろう。

「みんな、これを見て」

その紗月ちゃんが取り出したのは、四枚の紙切れだった。

みんな身を乗り出して、それをのぞき込む。

「にゃははっ！　お日様ランドのチケットじゃん！」

そうそれは、この近辺では有名な遊園地のチケットだった。

「ふふっ。しかも入場券じゃないわ。一日フリーパスよ」
「うわっ、すごいじゃん！　これどうしたの？」
「お日様ランドの経営に関わってる親戚からもらったのよ」

感嘆の吐息を漏らす面々。
一日フリーパスといえば、入場料はもちろん、どの乗り物に乗るのも自由、さらには昼食のサービス券までついているという、至れり尽くせりのシロモノなのだ。
もちろん真綿ちゃんも目をキラキラと輝かせていたのだけど、

「はっ……。わ……わらわはべつに、そんなものに興味なんてないぞよ！」

などと言って意地を張る。
きっと、女王卑弥呼の生まれ変わりの自分が、遊園地なんかで喜んだりしてはダメだ、とでも考えたのだろう。やせ我慢することはないのに。

「あら、真綿ちゃん。チケットを見た瞬間の顔、今まで見たことないほど明るく輝いていたわよ？」
「な……！？　そそそそそんなことはないぞよ！？　わらわは、べつに、その……」

イタズラっぽい笑みを含んだ紗月ちゃんの言葉に、慌てた声を上げる真綿ちゃん。
でも、

「だったら、真綿ちゃん抜きで、三人で行きましょうか」

という意地悪な提案に、

「でででででも、せっかく用意してくれたのじゃろう？　無駄になっては悪いからの。仕方がないから、行ってやろうではないか！」

腕を組んでそっぽを向きながら、偉そうに答える。

その様子を見て、残りの三人はたまらず吹き出した。

「にゃはははっ！　真綿ちゃんのために用意したチケットなのに、真綿ちゃんをのけ者にするわけないじゃんっ！」

「ふふっ、さすがだわ」

「あはははは、真綿、真っ赤になってる」

からかわれていたことにようやく気づいた真綿ちゃんは、さらに真っ赤になりながら、

「だ……な……おぬしら、ひどいぞよ！　わ、わらわは、わらわは……！」

と、言葉になっているかも微妙な声でわめき散らすのだった。

そのとき、不意にドアが開けられ、女の子が入ってきた。

「みなさん、いらっしゃいませです」

もちろんそれは、勇授くんの妹の唯夢ちゃんだ。

今日もやっぱり、お母さんから頼まれたのだろう、紅茶とお菓子を乗せたトレイを持ってきてくれたようだ。

すると唯夢ちゃんは目ざとく、紗月ちゃんの持つチケットを見つける。

「あっ、あっ、あ～っ！　それっ！　お日様ランドの一日フリーパスチケットじゃないですか!?　うわ、いいないいな～！　ゆいむ、行ってみたかったんです～！」

しっかりした印象のある唯夢ちゃんではあるけど、チケットを見てはしゃいだ黄色い声を響かせている彼女は、普通の小学校四年生の女の子だった。

それが自分のために用意されたものではないことは、もちろんわかっていただろう。

でも、理性で止めるよりも先に、言葉が飛び出していたに違いない。

「あ……、ご、ごめんなさいです。気にしないでください」

一日フリーパスが結構な値段のするものだということもわかっているからか、唯夢ちゃんは気を遣わせないように、最高潮にまで上がってしまっていたテンションも戻して、そう落ち着いた声で言う。

それを聞いて本当に気にしないで、「それじゃあね」と彼女を帰してしまうことなんて、普通ならできはしないだろう。

とはいえ、チケットは四枚しかなかった。

ここは兄として、ビシッと言うべきだ。そう考えた勇授くんが口を開く。

「ごめんね、唯夢。でも、チケットが足りないから、唯夢は連れていけないんだ。そのうちきっと、ぼくが連れていってあげるから、今回は我慢してね」

……あまり、ビシッと言う、という感じではなかったけど。

ともかく、そうやって諦めさせようとした。

ただ、その勇授くんの行動は必要なかったようだ。

勇授くんや孝徳くんは気づいていなかったみたいだけど、紗月ちゃんと真綿ちゃんが、ちょっと不可解な動きを見せていた。

紗月ちゃんが真綿ちゃんにちらりと視線を向け、それに応えて、真綿ちゃんはこくりと頷く。

その直後、紗月ちゃんがこう言った。

「実は、まだ家に何枚かチケットが残ってるの。だから唯夢ちゃん、一緒に行きましょう」

「え？　ほんと？　いいんですか！？」

紗月ちゃんの声に、ぱーっと明るい笑顔を浮かべる唯夢ちゃん。

「ええ。明日は思いっきり、楽しみましょう」

「わぁ～い！　ありがとうです～！」

自分も連れていってもらえることになり、歳相応にはしゃぐ唯夢ちゃんを見て、みんなほのぼのとした気持ちに包まれていた。

お日様ランドに五人で行くことが決まったとき、時間はすでに午後になっていた。

さすがにそのまま直行というのも一日フリーパスがもったいない。善は急げという言葉はあるものの、ここはぐっと我慢して、次の日に行こうという結論に至った。

そして日曜日の朝、いつものメンバーに加え唯夢ちゃんをゲストに迎えた五人は、電車で三十分ほどかけて、お日様ランドへと到着した。

開園時間の十五分前に到着。並んでいる人もいたものの、それほ

ど大勢というわけではない。
敷地もそれなりに広く外観も綺麗だというのに、どうやらあまり混まないようだし、結構な穴場と言えるのかもしれない。
ともかく真綿ちゃんたち一行は、開園時間と同時に意気揚々と遊園地の中に入っていくのだった。

6

さて、五人でお日様ランドに来てみた真綿ちゃんたちだったわけだけど。

遊園地などの乗り物というのは、なかなか五人で一緒に乗れるものはない。

というわけで、ここはふた組に分かれておこう、という話になった。

そして、決まったのが、勇授くんと真綿ちゃんの組と、孝徳くんと紗月ちゃんと唯夢ちゃんの組だ。

唯夢ちゃんは勇授くんの妹なのだから、一緒のほうがいいんじゃないかという意見もあったのだけど、それは紗月ちゃんが否定した。

彼女いわく、勇授くんと真綿ちゃんのふたりに小さい唯夢ちゃんを任せるのは心配、とのこと。

「ゆいむ、小さくなんてありません！」

と言って、唯夢ちゃんが可愛らしく頬を膨らませていたけど。

ともかく組み合わせも決まったところで、思う存分、お日様ランドを楽しむことに専念し始める。

組分けしたとはいっても、一緒に乗るのを分けるだけで、どれに乗るかはみんなで決め、列がある場合には一緒に並んだ。

途中、サービス券を使って昼食を取ったときを除いて、ひたすらたくさんの乗り物などを楽しむ真綿ちゃんたち一行。

ただ真綿ちゃんは、どうもちょっとだけ、楽しむ方向性が違っているように思えたけど。

相手が相手だけに、なかなか上手くはいかない様子。
どういう感じだったかというと……。

その1。ジェットコースター。

きゃーきゃーと叫ぶ女の子と、ぼくがついてるから大丈夫だよ、と声をかけてくれる男の子。
といったことを想像したのだろうけど。
ジェットコースターに乗っているあいだは安全装置でがっちりと体を固定されるため寄り添ったりもできず、どちらにしても風を切る音でまともに会話なんて交わせない。
降りたら降りたで足はふらつき、しかも真綿ちゃんは酔ってしまったようで、色気もなにもない展開に……。

「真綿、大丈夫？」

と、木陰で背中をさすられることになるなんて、真綿ちゃんとしては屈辱だっただろう。
もっとも、そんなことを考えていられる状態ではなかったみたいだけど。

その2。コーヒーカップ。

さすがに絶叫マシーン系は無理があったかのぉ、と思い直し、楽しく笑い合えそうな乗り物を選んでみた真綿ちゃん。
ところが、コーヒーカップというのもなかなかハードな乗り物で、

しかも勇授くんのテンションが意外にも高まり、真ん中のハンドルをひたすらぐるぐると回転させるという行動に出たりして、大変なことになっていた。
結果、再び真綿ちゃんは酔ってしまい、降りたあとに足もとはふらふら、顔は青ざめ、またもや木陰で背中をさすってもらう羽目に。

その3。お化け屋敷。

乗り物系はダメじゃ！
ということで、次に選択されたのはこれ。

「きゃあ、怖いのじゃ」

真綿ちゃんらしくなく怖がって、薄暗がりのお化け屋敷の中、勇授くんに身を寄せる。
ここまでやったなら、いくら鈍感な勇授くんといえども、いい雰囲気になる……かと思いきや。

「うわあああああああああ！」

ビクッ！

真綿ちゃんのほうが驚いてしまうほどの叫び声を上げ、勇授くんは逃げるようにお化け屋敷を駆け抜けてしまう。
どうやら勇授くんは、お化けが心底苦手みたいだった。

「ちょ……、待つのじゃ勇授！　わらわを置いていくでない！」

こんなところでひとりぼっちになるのは、さすがに嫌じゃ！
そう思って必死に追いかける真綿ちゃん。
というわけで、なんの進展もなく一瞬にしてお化け屋敷終了。

その４。観覧車。

こ……これなら定番じゃろう！　今度こそ……！
意気込んで乗り込む真綿ちゃん。

ここならお化けなんていないし、完全に密閉された空間だから逃げ出すこともできない。
そう思ったのだろうけど、今度は自分自身のことが考慮から抜け落ちていた。
真綿ちゃんは、高所恐怖症だったのだ。

「うぐあ、めちゃめちゃ高いぞよ!?　ひぃ、風でゴンドラが揺れておる！　落ちたりしないかや!?」

勇授くんのことを考えている余裕なんてなく、ガタガタと震えるばかり。
高さだけならジェットコースターだってかなりあったわけだけど、観覧車の場合ゆっくりだからか、ジェットコースターよりも高さを意識してしまうようだ。

くぅ……、どうしてこうも、思いどおりにならないのじゃ……！
などと悔やみつつも、真綿ちゃんは頭を抱えてガタガタと震え続ける。
でも。

「真綿、大丈夫？」

そっと、

勇授くんが真綿ちゃんを包み込む。

彼の温もりと優しさを感じて、真綿ちゃんの体の震えも、収まってきたようだ。

……なんだか、落ち着くのじゃ……。

ぎゅっ……。

控えめながら勇授くんにしがみつく真綿ちゃんと、そんな彼女を優しく抱きしめ返す勇授くん。

「ぼくにつかまってれば、落ちないからね」

……いやいや、それはないでしょ。落ちるなら一緒に落ちちゃうだろうし。

思わずそんなツッコミを入れたくなってしまう場面だけど。

若干ずれた感覚の勇授くんではあったものの、真綿ちゃんはとても幸せそうだった。

なかなか思惑どおりにいかなかった真綿ちゃんだったけど、こうして最終的にはどうにか望んだような結果を得ることができたようだ。

もっとも、そのときのふたりの様子を隣のゴンドラからバッチリのぞき見ていた残りの三人に、あとでたっぷりと冷やかされることになるのだけど。

1

週が明け、月曜日の昼休み。
屋上へと出るドアの前のスペースに、また数人の人影があった。
それはもちろん前のときと同様、いつものメンツ、すなわち真綿ちゃんたち四人なのだけど。

「で？　どうだったの！？」

真綿ちゃんを押し倒すくらいの勢いで問い詰めているのは、珍しくテンションの高まっている紗月ちゃんだった。
そのあまりの勢いに、真綿ちゃんのほうが若干引いているほどだ。

昼休み直前、真綿ちゃんの携帯電話にメールの着信があった。
それは以前にも情報を送ってきていた、「ガロ」という名前で登録されている人からのメールだった。
真綿ちゃんは詳しく話さなかったけど、勇授くんが言っていたように、お手伝いさんってことになるのだろうか。

今回も調査結果の報告が送られてきたのだろう。
昼休みになると、真綿ちゃんはその内容について考えなしに話そうとした。

「今回は紗月に関する情報みたいじゃの」

と言ったところで、調査結果の話だとわかった紗月ちゃんが、場所を移動しようと提案した。
ま、これも前回と同様なのだけど。
ただ前回と違っていたのは、自分に関する情報だというのを紗月

ちゃんが聞いていたことだ。
　というわけで、屋上へと出るドアの前に着いた瞬間、ものすごい勢いで真綿ちゃんを問い詰め始めたのだった。

　どうしてそこまで、と思わなくもないけど。
　自分以外の三人は歴史上の人物の祖先だったり生まれ変わりだったり、といった話があったというのに、自分にだけなかったのを相当気にしていた、ということなのだろう。

「ほらほら、もったいつけてないで、早く白状して楽になりなさい」
「にゃはは！　紗月ちゃんが壊れてるなぁ！　それじゃあ取り調べだよ！」
「あはははは。そうだね。取り調べを受けるなんて、真綿、なにをやらかしたの？　強盗？　恐喝？　婦女暴行？」
「こら勇授！　いくらなんでも、ふざけすぎではないかの？」

　勇授くんのいつもどおり学習能力のないセリフに、真綿ちゃんは怒りでこめかみをピクピクさせている。
　そんな様子なんてお構いなしに、紗月ちゃんは顔をぐいっと近づけてさらに尋問を強化する。

「そんなことより、早く話しなさい。話さないとどうなるか……」
（にやっ）
「な、なんじゃその笑いは!?　わ、わかったから、ちょっと離れるのじゃ！」

　完全に圧され気味の真綿ちゃんが慌てた答えを返すと、紗月ちゃんはようやく彼女を解放した。

「ふう……。驚いたのじゃ。紗月は実はかなり怖いおなごなのじゃ

な」

「いいから話しなさい」（にこっ）

ぞくっ。

笑顔ながらも絶対零度の冷たさを感じさせる紗月ちゃんに、さすがの真綿ちゃんも背筋を凍らせていた。

「わ……わかっておるのじゃ。じゃが、過度に期待はせぬようにの」

そう前置きをして真綿ちゃんは話し始める。

「紗月は、わらわの国、つまり邪馬台国に仕えていた配下の国の王だったようじゃ。もちろん正確には、その王の子孫、ということになるがの。わらわと違って、生まれ変わりで記憶も残っている、ということはなさそうじゃが。紗月の名字、山本というのも、邪馬台国の下（もと）に仕える、という意味からつけられた可能性が高そうじゃな」

「ふむふむ、それで？」

「……いや、それだけじゃ」

「……」

しばらく沈黙したのち、紗月ちゃんは質問を重ねる。

「それじゃ、その王の名前とかは？　歴史の教科書とかに載ってるような人？」

「いや、名前まではわからぬ。記録として残っている史実にはまったく出てきたりもせぬようじゃ。わらわも、さすがに覚えておらんしのぉ」

「……」

再び沈黙する紗月ちゃん。

そして。

「つまんない。なんでわたしだけ、歴史の教科書に載ってないのよ」

大声を張り上げたりはしなかったものの、明らかに不満を漏らす。

う〜ん、そんなに歴史の教科書に載りたかったのだろうか。

「ま……まぁ、そんなに沈むことはなかろう？　勇授や孝徳にしたって、所詮は自分のことではないのじゃからの」

……真綿ちゃんが気を遣っているなんて。こんな場面が見られるとは、思ってもいなかった。

紗月ちゃんもそんな真綿ちゃんの様子には気づいたのだろう。「ま、いいわ」と、自らの気持ちの高ぶりに終止符を打っていた。

「時代のずれはあるわけじゃが、過去に関わりのあった者がこうして集まっておる。おぬしら三人がわらわのそばにいるというのも、深い縁（えにし）を感じるのぉ」

場を取りまとめるように、という考えがあったのかはわからないけど、真綿ちゃんはそうつぶやく。

「あはははは。あの春歌さんって人も？」

「……あやつのことは、無視しておきたいところじゃ……」

勇授くんからのツッコミに、真綿ちゃんは眉根を寄せるのだった。

2

「それじゃあ、これで帰りのホームルームを終わります～。みなさん、車に気をつけて帰ってくださいね～！」

なんとなく小学校っぽいような気がしなくもない言い方と仕草で、みつき先生が生徒たちに手を振る。

と、思い出したかのように、というより、本当に今思い出したのだろう、先生は慌てて話しかけてきた。

教室の斜め前、真綿ちゃんと勇授くんの席に集まって、いつものように雑談を開始しようとしていた面々に向かって。

「そうでした、中野さんたち！　ちょっとお話があるんですけど、職員室まで来てもらえますか？」

先生からの呼び出し。

というと、だいたい悪さをして説教される、なんて場合が多いだろう。

「あはははは。呼び出しを食らうなんて、真綿、なにをやらかしたの？　遅刻？　忘れ物？　先生への暴行？」

ゲシッ！

昼間にも聞いたようなセリフを吐いた勇授くんは、真綿ちゃんから容赦のない蹴りを食らっていた。

呼び出しを食らっているというのに、あくまでマイペースなふたりだ。

「にゃはははっ！　相変わらずだなぁ！　それにさ、真綿ちゃんだ

けじゃなくて、おいらたちも呼び出されてるんだよ？　なんだろうね～、わくわくするよっ！」

「呼び出し……、つまりはタイマンってことね。ふふっ、いいわ。受けて立ちましょう」

……マイペースなのは、残りのふたりも一緒だったようだ。

「あ、あのねえ……。まったく、あなたたちは……。え～っと、詳しくは職員室で話しますけど、呼び出し、というわけではないですよ？　ちょっと気になったので……。ともかく、先生は先に行ってますから、あとで必ず来てくださいね？」

みつき先生は少々ため息まじりにそう告げると、すたすたと教室から出ていった。

☆☆☆☆☆

「それで、どういったご用件でしょうか？　やはりタイマンですか？」

「違います！」

職員室で自分の席に座って待っていたみつき先生の前に立つやいなや、紗月ちゃんが先生をからかう。

ま、それもわからなくはない。なんだかこの先生、からかってほしそうなオーラを発しているし。

もちろん本人は、「そ、そんなことはありません！」って否定するだろうけど。

「こほん！」

軽く咳払いをしたあと、みつき先生はこう切り出した。

「あなたたち、なにか悩みごとがありますよね？」

お……おお～。

この先生、とても頼りない感じだと思っていたけど、さすがに教師の端くれとでも言うべきか、しっかりと生徒たちの様子は見ていたみたいだ。

もともとちょっとおかしな集まりである真綿ちゃんたちグループだというのに、その変化に気づけたのは讃えてあげるべきかもしれない。

ともかく、真綿ちゃんたち四人も顔を見合わせる。

最近起こっている、春歌ちゃん絡みの出来事。

そのせいで真綿ちゃんはガラにもなく思い悩んだりしていた。

周りが気を遣い、いつもどおりのバカ騒ぎになってることも多かったけど、それでも先生には気づかれていたのだ。

思い悩んでいる理由まではさすがにわかっていないとしても、驚きを隠せない様子の四人だった。

そんな彼らに、みつき先生はこう続けた。

「なんでも言ってください！　成績の悩みでも、身体的な悩みでも、恋の悩みでも！　ぜひ……ぜひ先生に、教師らしく相談に乗らせてください！」

言いながらどんどんと勢いづいていったのだろう、彼女は身を乗

り出し、両手を合わせて懇願するように迫る。
さすがに気圧される四人。

勇授くんがなにか言おうとはしたものの、すぐに口をつぐんでいた。
真綿ちゃんが三年生の女子生徒に狙われているらしい、ということを正直に相談しようとしたに違いない。
でも、巻き込んでしまうと先生にも危険があるかもしれない、とでも考えたのだろう。

残りのみんなも、それぞれに考えを巡らせ、口を閉ざしているようだった。
そんな中、真綿ちゃんだけは、ちょっと違っていた。

「い……言えるわけないじゃろう！」

ダッ！
真綿ちゃんはそう叫ぶと、いきなり駆け出し、その場から逃げるように職員室を飛び出していった。

「真綿！」
「中野さん！？」

素早く追いかけたのは、勇授くん。真綿ちゃんを追いかけ、続いて飛び出していく。
それに対してみつき先生は、あまりに突然で椅子から立ち上がることもできず、空しく伸ばした手で空をつかむのみだった。

「にゃははっ！　なにが言えるわけないなんだろうね～？」
「ふふっ、真綿ちゃん、真っ赤になってたわ。さすがね」

残りのふたりは、口々にそう言うだけ。
と――。

「うふふふふふ」

みつき先生がいきなり笑い始めた。

「あれは完全に、恋する乙女の反応ですね！　燃えてきました！　教師生活四年目、そろそろわたしの本領を発揮するときですよね！」

椅子から勢いよく立ち上がり、拳をぐっと握りしめた彼女の瞳は、言葉どおりメラメラと熱く燃えているように思えた。

まぁ、熱く、というか、暑苦しく、と言ったほうがいいかもしれないけど。

そんな先生の様子を見た孝徳くんと紗月ちゃんは、さぞや呆れているだろう……なんて思うのはもちろん大間違い。

「にゃははっ！　先生が燃えてる～！　教育は爆発だ～って？」

「ふふっ、面白くなりそうね。さすがだわ」

ふたりはやっぱり、いつもどおりだった。

「それで、先生。具体的にどうするつもりなんですか？」

「うふふふ、まぁ、見てなさい」

いつもの弱気で頼りないみつき先生からは考えられない、見ようによっては狂気に満ちているとも思える笑みを浮かべながら、そうピシャリと言いきる。

先生はまず、職員室の一角へと向かった。そこにはマイクと放送

設備があり、校内のスピーカーから声を流すことができるのだ。
ボタンを押し、ボリュームのツマミを上げると、みつき先生がマイクに向かって声を響かせた。

「二年二組、中野真綿さんと藤原勇授くん。二年二組、中野真綿さんと藤原勇授くん。至急、体育館まで来てください。なお、呼び出しに応じない場合は、ペナルティを課しますので、覚悟してください。繰り返します。二年二組、中野真綿さんと――」

そう、校内放送での呼び出しを敢行したのだ。
呼び出しに応じない場合は、ペナルティを課す。
そうまで言われたら、さすがに誰も無視はできないだろう。もちろん、まだ学校内にいれば、という前提条件が必要ではあるけど。

「呼び出し……はいいとして、どうして体育館なんですか？」
「うふふふ、作戦のためよ。それじゃ、行きましょうか！」

みつき先生は孝徳くんと紗月ちゃんにそう言うと、職員室の後ろ側の壁にかけてある中から、ひとつのカギをつかみ取り、さっさと職員室を出ていく。

「にゃはははっ！　ま、行こうかね！」
「ふふっ。当然よ。最後まで見届けなきゃ」

ふたりは楽しそうに含み笑いをこぼしながら、先生の後ろ姿を急いで追いかけていった。

3

「みつき先生、いったいなに用じゃ！？」
「あははは。真綿はこんな強制的な呼び出しにご立腹みたいだね」
噛みつくような勢いの真綿ちゃんと、いつもどおりといった感じの勇授くん。
真綿ちゃんが怒っているのは、言うまでもなく一目瞭然だったけど。
ともかくふたりは、みつき先生の呼び出しに応じて、体育館まで来ていた。

ふたりと先生、そして孝徳くんと紗月ちゃんは、体育館のステージの袖にいる。
ステージ袖から階段を下りると、そこにはドアある。ドアの横には、なにやらダンボール箱が積み上げられていた。
今みんながいるのは、その前だった。

みつき先生はおもむろにドアの鍵穴にカギを差し込む。
ガチャリ。
カギの外れる音がして、みつき先生がドアを引くと、その中からはホコリっぽい空気が流れ出してきた。

「ここ、あまり使われてないんだけど、倉庫になってるんですよ」

その先生の言葉どおり、それほど広くはない部屋の中に、雑然とダンボールやら予備の椅子やら照明機材やらが詰め込まれているようだった。
ドアの外にあったダンボールは、倉庫に入りきらなかったものを

積み上げてあるだけなのだろう。

「それで、悪いんだけど中野さんと藤原くん、ふたりでこの中を整理してもらえるかしら？　ダンボールも開けて、いらないのがあったら捨ててくださいね」

「な……！？　なんでそんなことを、わらわたちがやらねばならぬのじゃ！？」

さすがに文句が出る。

「いえね、今度ある合唱祭のときに、いろいろと機材を運び込むみたいなの。でも置き場所もそんなに多くないし、この倉庫も使いたいって話になってね。先生のクラスの分担ってことになってたんだけど、忘れてたんですよね～」

なにやら言い訳がましく説明しているみつき先生だったけど。

「だ……だからといって、なんでわらわと勇授なのじゃ！？　それに、孝徳や紗月もおるではないか！」

「別の分担場所もあるから、先生たちはそっちに行かなくちゃいけないんです。というわけで、中野さんと藤原くん、ふたりでここをお願いね！」

文句の言葉を放ち続ける真綿ちゃんに、先生は再び説明を加えていた。

「あはははは。真綿、あまり先生を困らせても悪いし、頑張ろう」

「……むぅ……。しょうがないのぉ。なぜわらわが、こんな疲れそうなことをせねばならぬのじゃ……」

そして勇授くんに諭された真綿ちゃんは、ぶつぶつ言いながらも倉庫に入っていった。

☆☆☆☆☆

「げほっ、げほっ！」

「あははは、すごくホコリっぽいね、ここ」

「笑いごとではないわ！　いくらなんでも、ひどすぎるじゃろう！？」

文句たらたらながらも、手は動かしている真綿ちゃん。

意外とそれほど嫌そうに見えないのは、やっぱり勇授くんとふたりだからなのだろう。

倉庫の中は物が溢れてごちゃごちゃしているから、自由に動き回れるほどのスペースもない。

だから自然と体が触れ合ったりなんかもしているみたいだし。

ちなみにこの倉庫に窓はなく、そのままでは真っ暗だった。

電気を点けてはみたものの、蛍光灯が二本あるうち、一本は切れていた。

しかも、積み上げたダンボールがその蛍光灯の近くにまであるため、光が遮られてしまい倉庫の中はかなり薄暗い状態。

ホコリっぽいし、さすがに閉めきるわけにもいかない、ということで、ドアは開けたままだった。

と、突然――。

バターン！

「きゃあっ！」

大きな音を立てて、ドアが閉まった。

もっとも、ドアが閉まったことより、真綿ちゃんのなにやら可愛らしい悲鳴のほうが驚きのような気もしたけど。

「あははは。真綿が女の子になってる」

「も……もともと女の子じゃ！」

勇授くんにいつもどおり蹴りを入れつつ、真綿ちゃんはドアノブへと手をかける。

もちろん、閉まったドアをもう一度開けようとしたのだ。

きっと、ドアを開けた状態で止めていたストッパーが外れただけと、高をくくっていたのだろう。

でも――。

「おや？」

ガタガタ、ガタガタ、ガタガタガタガタガタガタ！

真綿ちゃんがどんなにドアノブを回して押そうとも、びくともしない。

念のため引いてみても結果は同じ。

「こ……これは……！」

「あははは。閉じ込められちゃったみたいだね～。そういえば、ドアの前にダンボールとか積んであったし、あれが崩れたのかな？」

青ざめた顔の真綿ちゃんに対して、勇授くんのほうは、やっぱり

いつもどおりだった。

「こんなときに、なにをノンキにしておるのじゃ！？　どうしていつも勇授はそうなのじゃ！」

「あはははは。でも、焦っても仕方がないよ。ぼくたちがここにいるのはわかってるんだから、あとで先生たちが見つけてくれるよ」

真綿ちゃんはそんな勇授くんに怒りをぶつけるものの、やっぱり楽観的な答えしか返ってこない。

「あとでって、どれくらい待てばよいというのじゃ！？　こんなホコリっぽくて狭くて薄暗いところで、しかも勇授なんかと一緒に、何時間も閉じ込められるなんて、わらわは嫌じゃ！」

「あはははは。嫌だって言っても、現にこうなっちゃってるわけだし。出口はこのドアだけなんだから、ここが開かない以上、助けを待つしかないでしょ？」

「それはそうじゃが……！　あっ、そうじゃ！　ケータイ！」

真綿ちゃんはポケットから携帯電話を取り出す。だけど、液晶画面を見てすぐに落胆の表情となった。

「ダメじゃ……、圏外……」

「あはははは。ぼくはケータイ持ってないしね」

「ぐぅ……、この役立たずめ！　というか、勇授、くっつくでない！」

「え？　でも、狭いからどうにも……」

「くっつくなと、言うておるじゃろう！」

「わっ、押さないでよ」

「う……うるさいっ！　……あっ」

ドン、ガタガタガタガタッ！

「うわっ！」

「きゃあっ！」

真綿ちゃんが暴れたことで、腕がダンボールにぶつかり、その拍子に積み上がっていた上のほうのダンボールから順に、崩れて落ちてきたのだ。

中身もばらまかれ、ふたりに襲いかかってくる。

そして。

「……！」

真っ赤になる真綿ちゃん。

その瞬間、

「ちょっと、大丈夫！？」

ダンボールが崩れた音を聞きつけたのだろう、先生たちが倉庫に飛び込んできた。

☆☆☆☆☆

「ごめんなさいね」

助け出された真綿ちゃんたちの前で、みつき先生が頭を下げる。

実は全部、みつき先生が仕組んだことだった。

途中でドアを閉めたのも先生たちで、さらに開かないように押さ

えていたのだという。

みつき先生は、ふたりに仲よくなってもらうためには、やはり距離を縮める必要があると考えた。

というわけで、狭い場所にふたりで閉じ込める作戦を実行したらしい。

「あはははは。でも先生、どうしてぼくと真綿だったの？」

「……中野さん、先は長そうですねぇ」

「う……。な、なんのことやら、わらわにはわからぬのじゃ！」

文句を言いながらも、真綿ちゃんはなんとなく満足顔。

さっきダンボールが崩れたとき。

とっさに勇授くんが身を挺して、真綿ちゃんをダンボールから守ってくれていたのだ。

そして、床に仰向けで倒れた真綿ちゃんを庇った勇授くんは、彼女に覆いかぶさるような形になっていた。

もちろんとっさだったから、体勢を整えている余裕なんてなかった。

気づけば勇授くんの顔は、真綿ちゃんの顔のすぐ真横にあった。

勇授くんの重さも同時に感じることにはなったものの、彼の温もりを全身で感じたため、真綿ちゃんはあのとき真っ赤になっていた。

だからこそ、ため息をつきながらも、彼女は満足顔になっているのだった。

「にゃははっ！　なかなか面白かったな～！」

「ふふっ、そうね。さすがだわ」

もちろん孝徳くんと紗月ちゃんも、面白い余興を見ることができたからか、満足げな笑顔を浮かべている。

そんな中、ただひとり、みつき先生だけが、

「やっぱりわたし、教師に向いてないのかしら……ぐすっ」

と半べそになっていた。

4

「それにしても、楽しい余興だったわ」
「にゃははっ！　真綿ちゃん、ほんとに真っ赤だったもんね～！」
通学路を真綿ちゃんの家へと向かって歩いているいつものメンバーは口々に、主にひとりを対象にしたからかいの言葉を続けていた。
もちろん対象となっているのは真綿ちゃん。
本来ならばもうひとり、勇授くんも同じようにからかいの対象となるはずなのだけど。
どんなに必死になってからかったとしても、いつもの「あははは」という笑い声が返されるだけだから、自然とターゲットから外されている。
ということで、よりいっそう真綿ちゃんへの攻撃が激しくなっているというわけだ。
「わ……わらわは全然、面白くなどなかったぞよ！」
不満顔で頬を膨らます真綿ちゃんは、やっぱりどこか子供っぽい印象を与えさせる。
だからこそ、からかいがいもあるのだろう。
「本当に？　ダンボールに押し潰されてるところを助け出されてから、真綿ちゃん、なんだかずっと嬉しそうだったけど？」
「なななななにを言うておるのかや!?　わ、わらわには、なんのことやら、さっぱりじゃ！」
「にゃははははっ！　ダンボールに押し潰されたってより、勇授に押し潰されたって感じだったのが、なにか影響してるのかな～？」

「ななななななんじゃそれは!?　だいいち押し潰されたら痛いし重いしで、嬉しいはずがなかろう!?」
「あはははは、そうだよね。ぼくもそう思うよ。もし上下が逆だったら、ぼくが真綿の体重でペシャンコに――」

ゲシッ！
相変わらずの勇授くんは、真綿ちゃんから蹴りを食らう。

そんなこんなで、いつもとほとんど変わらない下校途中のひととき。
ただ、一瞬だけ。
なぜか会話が途切れた瞬間があった。

「……ん?　おぬしら、いきなり黙って、どうしたのかや?」
「え?」
「え～っと……」

真綿ちゃんの言葉に、なんだかよそよそしい雰囲気で顔を見合わせている三人。

「あははは。なんでもないよ」
「そうかや?　まぁ、よいがの」

怪訝な表情を残しながらも、三人の様子を察してか、それ以上は追求しない真綿ちゃんだった。

☆☆☆☆☆

「今日もご苦労じゃったの」
「うん。真綿、また明日ね」
「うむ。また明日じゃ」

真綿ちゃんの広いお屋敷の前に着き、さよならの挨拶を終えると、彼女は門をくぐって歩いていく。
危険があるかもしれない、という理由で送り迎えを続けているわけだけど。
ここまで来れば、もう安全なはずだ。

今日も真綿ちゃんを無事に送り届けた勇授くんたち。
いつもなら、真綿ちゃんの隣の家である勇授くんはそのまま自分の家に戻り、孝徳くんと紗月ちゃんはふたりで帰っていくところなのだけど。

「……とりあえず、勇授くんの家に……。いいかしら？」
「うん。どうぞ」

おそらくは最初から……というよりも、さっきの一瞬の沈黙のときから、決めていたことなのだろう。
あうんの呼吸でそう言葉を交わすと、勇授くんは紗月ちゃんと孝徳くんを伴って自分の家に入っていった。

☆☆☆☆☆

「ねぇ、さっき……」
「うん、そうだね」
「にゃははっ。あれってやっぱり、あれだよね？」

勇授くんの部屋で三人は、ひそひそと話している。
もちろん、さっきの一瞬の沈黙の原因となったことについてだ。
ひそひそとした声を、さらに小さくして話は続けられる。

「そうね。真綿ちゃんを、隠れてじっと見ているみたいだったわ」
「うん。あまりよくは見てないけど、サングラスをかけた男の人だった。黒いスーツを着てたよ」
「にゃははっ。怪しいね～」

そう。
あのとき三人は、隠れて真綿ちゃんに目を向けている人影に気づいたのだ。

とはいえ、気づかれたことを悟られたら、強硬手段に打って出てくるかもしれない。
そう考えて、気づいていないふりをしたまま、真綿ちゃんを家まで送り届けた。
そして真綿ちゃんが家に入ったあと、辺りを見回してみると、その人影はすでに消えていたというわけだ。

「もしかして、春歌さんの仲間だったりするのかしら？」
「にゃははっ。でも黒いスーツにサングラスの人だったんだよねぇ？　仲間だとしたら、どんなつながりがあるんだろう？　ちょっと怖いなぁ」
「あははは。まぁ、なにがあっても、ぼくたちで真綿を守ればいいんだよ」
「ふふっ、そうね。余計な心配をかけたくないし、真綿ちゃんには内緒にしておきましょう」
「にゃははっ、了解っ！」

こうして、三人のひそひそ話は終わりを告げる。

「……それじゃあ引き続き、作戦会議といきましょうか」

と思ったら、まだまだ続くみたいだった。

5

その次の日の放課後となり、いつもの面々は、いつもどおり四人揃って学校を出た。

……と、そこで。

「にゃははっ！　ごめんね、みんな。おいら、今日はどうしても用事があって、一緒に行けないんだ！」

孝徳がそう言って両手を合わせた。

「ほう、珍しいのぉ。恋人などはどう考えてもおらぬじゃろうし、家の手伝いってところかの？」

なんとなく不満顔の真綿ちゃんが、意地悪口調で言い放つ。

その様子から察するに、真綿ちゃんはここ最近の四人揃っての下校時間を、かなり楽しんでいたようだ。

「余計なお世話だっての！　っと、急がないといけないんだった！　ほんとごめん。とにかくみんな、気をつけてね！」

孝徳くんは真綿ちゃんのツッコミに応対しつつも、素早く片手を上げ、校門を出て自分の家の方向、つまりは真綿ちゃんの家とは反対方向に走り去っていく。

「なんじゃなんじゃ、孝徳のやつ。慌ただしい男じゃのぉ」

「ふふっ、そういう日だってあるでしょ」

「あははは、そうだね。毎日わざわざ遠回りしてくれてるんだしね」

まだ不満そうにしている真綿ちゃんを、紗月ちゃんと勇授くんがなだめるようにそう言うと、ふたりは歩き始めた。
もちろん真綿ちゃんも、慌ててそれに続く。

「三人だけじゃと、なんかちょっと、寂しく感じてしまうのぉ」

歩きながらも、真綿ちゃんはまだ不満げな様子。

「あははは。真綿は、孝徳がいないと寂しいんだね」
「ふふっ。密かに想いを抱いていたのかしら？」
「なっ、なにを言うのじゃ、おぬしら！　べつにわらわは、そういうつもりでは……！」

ひとり減っても、真綿ちゃんがからかわれる対象だというのは変わらないらしい。
そんなふうに喋りながら、三人は通学路を歩いていく。
やがて、あまり人通りもない、細めの路地が続く地域へと差しかかった。

曲がり角が見えたところで、紗月ちゃんが目で合図を送ると、勇授くんは黙って頷き返す。

そこは十字路になっていた。
その十字路を曲がった瞬間。
紗月ちゃんと勇授くんが行動を開始した。

「……！？　なんじゃ？　むぐっ！？」

真綿ちゃんの体を、紗月ちゃんと勇授くんのふたりがかりで抱え上げる。

驚きの声を上げようとする真綿ちゃんの口は、勇授くんが手で塞いだ。
そして十字路の少し先にある細い路地へと、真綿ちゃんを抱えたまま滑り込むふたり。
その細い路地の手前には電柱が立っていて、十字路からはぱっと見、そこに通路があるとは思えないだろう。

一瞬にして、周囲は静寂に包まれた。

と、十字路から顔をのぞかせるサングラスの男の姿があった。
当然そこにいるはずの三人の姿が、いきなり消えていた。
さすがに慌てた様子で、隠れることも忘れ、きょろきょろと辺りを見回し始めるサングラスの男。

三人は、十字路を左に曲がったはずだ。
でも曲がった先には、人影が見えない。
実際には、電柱の陰に隠れた細い路地に、三人が隠れているわけだけど。
サングラスの男にしてみれば、ターゲットを見失ってしまったという状況にしか思えないはずだ。

もしも真綿ちゃんを狙っているとすれば、そのターゲットを見失ったら慌てるに違いない。
そう考えて、こういった行動に出たのだ。
サングラスの男にとって想定外の事態は、さらにもうひとつ用意されていた。

「えいやっ！」
「うわっ！？」

突然サングラスの男に、なにかが覆いかぶさる。
それは、大きな網だった。
たまらず地面に倒れる男。

「おいこら、観念しろっ！」

続けて飛び出してきたのは孝徳くんだ。
彼は勢いに任せて、網に絡みつかれてもがいている男の上へとのしかかる。
隠れていた細い通路からは、勇授くんと紗月ちゃんも飛び出してきた。

「ふふっ、しっかり白状してもらうわよ。真綿ちゃんを狙ってたわよね？　誰の差し金？」
「あははは。正直に言わないと紗月ちゃんが本領発揮するから、覚悟してね」

サングラスの男は慌てた様子ではあったものの、そんなふたりの声を受けても、なにも喋ったりはしなかった。
その暗いサングラス越しの瞳は今、どんな色を映しているのか。
などと考えていると、取り残されていた真綿ちゃんがようやく細い路地から出てきて、現状を目の当たりにする。

勇授くんと紗月ちゃんに鋭い視線で見下ろされ、網を全身に巻きつけられた上から孝徳くんにのしかかられているサングラスの男。
その光景を見た真綿ちゃんは、こう叫んだ。

「ガロ！」

ガロ。

どこかで聞いた、というか、見たような気がする――。
三人はそう思っただろう。
そしてすぐに思い出した。
真綿ちゃんに送られていた調査報告のメールの差出人の名前が、ガロだったことを。

つまり、このサングラスの男は、真綿ちゃんの家の使用人だったのだ。
使用人というよりは、真綿ちゃんに専属でついているボディーガードと言ったほうがいいかもしれない。
真綿ちゃんが小さい頃からずっと、外出する際には少し離れた場所に隠れ、見守っていたらしい。
もちろん、真綿ちゃんが危険にさらされたりしない限り人前に姿を現すこともないため、幼馴染みである勇授くんですら、そのボディーガードの姿を見たことはなかった。

ちなみにこの人の本名は、阿部雅路（あべまさみち）というらしい。
小学生の頃の真綿ちゃんが、名前の漢字を見て、「ガロだ！」と言ってから、彼女にはずっとそう呼ばれているのだそうな。

「そうでしたか。ガロさん、勘違いでこんなことをしてしまって、すみませんでした」

紗月ちゃんが素直に頭を下げる。

「いや、わたしも少々油断しておりましたから。それに、不意打ちとはいえ、とんだ失態をお見せしてしまいました。真綿さんが路地に連れ込まれたことにも気づかず、守れなかったわけですし、まだまだ精進しなければなりませんな」

サングラスをかけた上にヒゲをたくわえ、黒いスーツに身を固めるガロさんは、その威圧的な見た目とは裏腹に、とても優しい喋り方をする。
野太く渋い印象の声質ではあるものの、不思議と恐怖は感じない、安らかな響きを持った声だった。

「それにしても、ガロを打ちのめしてしまうなんての。驚きじゃ」
「あはは。でも、真綿が狙われてるってわけじゃなくて、よかったよ」
「ふふっ、そうね」
「にゃはは！　こんなボディーガードさんがついてるなら、おいらたちも安心していられるね！」

ガロさんというボディーガードの登場により、みんな、少し安心しているようだった。
もっともその安心も、そう長くは続かないのだけど……。
もちろんそんなことを、このときのみんなが知るよしもなかった。

6

昨日感じていた安心は、もう次の日の放課後には消えてしまうこととなる。

「大変だよ～！」

慌ただしい様子で廊下を走ってきた孝徳くんが、二年二組の教室に飛び込んできたのだ。

チャイムが鳴った瞬間に、ちょっとトイレ～！　と教室から飛び出していった孝徳くん。

戻ってきたと思ったらいきなり大声で騒ぎ立て、足音を響かせながら飛び込んできた、というわけだ。

その手には、なにやら封筒のようなものを持っている。

「孝徳は相変わらず、騒がしいのぉ。いったいどうしたというのじゃ？」

「真綿ちゃん、大変なんだって！　これ、見てよっ！」

孝徳くんは持っていた封筒を真綿ちゃんに手渡す。

封筒はすでに開封され、手紙は孝徳くんによって読まれたあとのようだ。

「むっ、この封筒、わらわ宛てではないか！　なぜ勝手に開けておるのじゃ、孝徳！」

「今はそんなことを言ってる場合じゃないってば！　とにかく手紙を読んでみてよっ！」

文句をぶつける真綿ちゃんに、孝徳くんはそう促す。
真綿ちゃんは仕方なく、といった様相で手紙に目を落とす。
もちろん勇授くんと紗月ちゃんも、身を乗り出してその手紙をのぞき込んだ。
そこには、こう書かれてあった。

『中野真綿殿

藤原勇授の妹、藤原唯夢を預からせてもらった
すぐに、三丁目にある廃ビルまで来られたし
なお呼び出しに応じない場合は、強硬手段を使うことも辞さない
考えだ
待っているぞ』

「これって、脅迫状じゃないの！　孝徳くん、これ、どうしたの！？」

さすがの紗月ちゃんも、慌てた様子を隠せない。

「いや、知らない三年生の女子に渡されたんだ。その人も、渡すように頼まれただけみたいだったけどね」
「それより、どうして唯夢ちゃんがさらわれるのじゃ！」

真綿ちゃんが怒りの声を上げる。

「もしかしたら、一緒に遊園地に行ったのを、見られていたのかも

しれないわね」

紗月ちゃんがいつもの落ち着きを取り戻したのか、冷静に分析している。

「だけどこれ、いったい誰からなんだろう？」

妹がさらわれたらしいというのに、勇授くんはいつもと大差ない調子でつぶやいた。

ただ、さすがにちょっとは焦りを感じていることが、その表情からうかがえる。

「この字……春歌じゃ」

『え？』

真綿ちゃんの言葉に、他の三人の声がハモった。

確かに、それが一番ありえそうな話ではある。

でも、文章も彼女らしくはなく、しかも筆で書かれたかなりの達筆な文字。

普通に考えたら、中学生の女の子が書いたものだとは思えないだろう。

「……真綿、どうして春歌さんの字だってわかるの？」

「え？　そ……それは、ま、前にもべつの脅迫状が届いておったのじゃ！　あなたは絶対に許しませんとか、そういう内容のな！　おぬしらには、心配させまいと黙っておったのじゃがの！」

勇授くんの疑問に、慌てて言い訳がましい言葉を返す真綿ちゃん。

そしてすぐさま、

「ともかくっ！　唯夢ちゃんが心配じゃ、急いで向かうぞよ！」

と叫び、勇授くんの腕をつかんで引っ張ると、ともに教室を飛び出していった。

「あっ、待ってよ、ふたりともっ！」

「わたしたちも行くわよ」

もちろんそんなふたりを追って、孝徳くんと紗月ちゃんも急いで駆け出していくのだった。

1

唯夢ちゃんを預かっているという内容の手紙を見て、真綿ちゃんを初めとしたいつもの四人が、呼び出し場所である三丁目の廃ビルへと向かっていた。

最初こそ走って現場まで行こうという勢いだったけど、廃ビルまでは結構な距離がある。

というわけで、今は疲れて歩き始めた真綿ちゃんに合わせ、残りの三人も一緒に歩いていた。

それにしても、呼び出しの手紙は真綿ちゃん宛てだったにもかかわらず、四人で行ってしまって大丈夫なのだろうか？

そんな疑問を口にする勇授くんだったけど、真綿ちゃんは澄ました顔で、

「べつにひとりで来いなどとは、どこにも書いてなかったのじゃ」

と言いきっていた。

それならそれで、もっと人を増やしてもよさそうなものだけど。

再び疑問の言葉をこぼした勇授くんに、

「あまり大勢だと廃ビルに入る前に気づかれて、追い詰められたと思った犯人が強硬手段に打って出る可能性もあるわ」

紗月ちゃんが答える。

「四人くらいなら、きっと想定内の範囲だから問題ないはずよ」

どこからそう考えるに至ったのかはわからないけど、紗月ちゃん

は自信満々に言い放っていた。
四人はそんなことを喋りながらも、早足で歩いていく。
と、ここでその勢いを削ぐ言葉が投げかけられた。

「だけどさ、このままなにも考えずに廃ビルまで行って、本当に大丈夫なのかな？　真綿ちゃんをおびき出すのが目的なら、危険な罠が仕掛けられてる可能性だって、あるんじゃない？」

孝徳くんが、そう言ったのだ。
珍しくまともな意見だ。孝徳くんにしては。

「うん、そうだね。いくら唯夢を助けるためといっても、そのせいで真綿や他のみんなが危険な目に遭うのは避けないと」

孝徳くんの意見を受けて、勇授くんも意見を重ねる。
はっきりとした声で言ってはいるものの、彼の表情は沈みきっている。
それはそうだろう。
実の妹が、さらわれたのだから。

「勇授……」

そんな彼に、真綿ちゃんが遠慮がちに声をかける。
こちらも、いつもの彼女とは思えない、暗い雰囲気に包まれていた。
勇授くんは黙って、視線を真綿ちゃんに向ける。

「すまないな……。わらわのせいで、こんなことになってしまって」
「……真綿のせいじゃないよ。というか、ぼくもまさか、唯夢にまで手を出してくるなんて思ってもいなかったし。完全に油断してた

よね。遊園地になんて、連れていくべきじゃなかった……」

ふたりとも、マイナス方向の思念に囚われていく。

「ちょっと、真綿ちゃんも勇授くんも。そんなに沈んでたってしょうがないわ」

「にゃははっ！　そうだよ！　今はおいらたちがしっかりしないと！　ねっ？」

ふたりを励ますように、紗月ちゃんと孝徳くんが努めて明るく振舞う。

その思いはしっかりと伝わったんだろう、真綿ちゃんと勇授くんは、声を揃えて答えた。

「そうだね」「そうじゃの」

それほど力強くはなかったものの、決意を込めた答えに、紗月ちゃんと孝徳くんも目を細める。

「よし、それじゃ、行こう！」

「ふふっ、わたしたちの恐ろしさ、思い知らせてあげましょう」

決意を胸に頷き合うと、四人は寂れた廃ビルの敷地内へ入っていった。

2

ガレキがうず高く積もる敷地内を歩き、今にも崩れそうなホコリっぽい廃ビルの中へと足を踏み入れる。
その途端、

「おーっほっほっほ、よく来たわね、真綿さん」

聞き覚えのある笑い声が響き渡った。
声の響きだけで、ぱらぱらと壁が崩れてきている。
その声の主はもちろん、真綿ちゃんが筆跡から予想していたとおり、蘇我春歌ちゃんだった。

そして彼女のすぐ横にはもうひとり。
見覚えのある女の子がいた。
彼女はロープで両手を縛られ、春歌ちゃんに背後から抱えられている。

「きゃ～、たすけてぇ～！」

悲鳴を上げているその子はもちろん、手紙にもあったとおり、勇授くんの妹である唯夢ちゃん。
なんとなく、余裕のある悲鳴のような気もするのだけど……。

ただ、彼女の目の前には、これみよがしにナイフがキラリと光っている。
春歌ちゃんが唯夢ちゃんを左手で抱え、右手を彼女の目の前まで回して、顔の前にそのナイフをかざしているのだ。
危険な状態なのは確かだろう。

さらに、春歌ちゃんの左右には、ずらりと黒いスーツを身にまとった男たちが構えていた。

「唯夢！　大丈夫か！？」

「お兄ちゃん～、たすけてぇ～！」

さすがの勇授くんも大声で叫ぶ。

唯夢ちゃんが助けを求める声も大きくなる。

もっとも、やっぱりどこか余裕が感じられるようにも聞こえてしまうのだけど。

ともかく勇授くんとしては、一刻も早く唯夢ちゃんを助け出したいと考えているだろう。

でも春歌ちゃんはナイフを持っている。

それに、彼女の周りにはスーツの男たちもいるのだ。

下手に手出しをすると、唯夢ちゃんを危険にさらすことになる。

勇授くんだけでなく、孝徳くんも紗月ちゃんも身動きが取れないでいた。

「おい、春歌！　おぬし、こんな小さな子を人質に取るなんて、恥ずかしいとは思わんのか！？」

そんな三人を差し置いて、真綿ちゃんが一歩前に踏み出すと春歌ちゃんに向けて叫ぶ。

あまり刺激するのはマズい。

そう考えていた三人ではあった。

でも、一瞬驚いたような顔をしていたものの、相手が真綿ちゃんでは止められないと悟っているのか、真綿ちゃんを制止するようなことはなかった。

いや、きっと三人とも、真綿ちゃんと同じように思っていたのだろう。

ここは真綿ちゃんの勢いに任せてみよう。

そう考えたに違いない。

ただ、真っ先にその真綿ちゃんの声に反応したのは、春歌ちゃんではなかった。

「ゆいむ、小さくなんてないよぉ～！」

自分が命の危険にさらされているというのを、わかっているのかいないのか、唯夢ちゃんはそんな文句の声を上げる。

「おほほほほ。小さくないらしいですわよ？　ということは、わたくしはべつに恥ずかしくなんてない、ということになりますわね」

「なにを言っておる！　どちらにしても、恥ずかしい行為に変わりあるまい！」

唯夢ちゃんの声を聞いて、笑いながら勝ち誇ったような物言いをする春歌ちゃんに、真綿ちゃんはなおも食ってかかる。

そしてさらに続けて質問を加えた。

「だいたい、どうしてこんなことをするのじゃ！？」

すさまじい勢いで大声をぶつけられながらも、春歌ちゃんは怯むことなく、落ち着き払った態度を崩しはしなかった。

「前から言っていると思いますが、お忘れですか？　あなたの祖先に討たれた蘇我入鹿の恨みを、子孫であるあたしが受け継いだのですよ。あなたと同様、生まれ変わりと言ったほうがいいでしょうけれど」

「じゃが、それならばわらわを直接討ちにくればよかろう!?　なぜ唯夢ちゃんや他の者たちを巻き込むのじゃ！」
「ごちゃごちゃとうるさいですわねぇ。あなたがたは今、あたしの手下に囲まれているんですよ？　覚悟したほうがいいのではないですか？」

春歌ちゃんの言葉で、黒いスーツの男たちが身構えた。
落ち着き払った春歌ちゃんと、怒鳴り散らす真綿ちゃんの言い争いが続く中、勇授くんたち三人は依然として、身動きが取れずにいる。

「でも、どうにかしないと……」

勇授くんは冷静に機会をうかがっていた。
いや、冷静とは言いきれないかもしれない。
その証拠に、彼の額には大粒の汗が浮かんでいる。

「おーっほっほっほ。こんな言い争いをしていても、埒が明きませんわね。みなさん、そろそろ無駄な抵抗はやめてください」

真綿ちゃんと言い争うのにも飽きてきたのか、春歌ちゃんはそう締めくくると、唯夢ちゃんの目の前にかざしているナイフにぐっと力を込めた。

「待て！　おぬしの狙いは、わらわなのじゃろう!?　唯夢ちゃんは解放するのじゃ！」
「おほほほほ。人にものを頼んでいるような態度とは、どう見ても思えませんが……。そうですわね、土下座でもしていただけたら、考えないこともないですわよ？」
「くっ……！」

面白そうに笑い声を上げながら、春歌ちゃんはそんなことを言い出す。

もちろん、真綿ちゃんがそんな言葉に従うはずは……。

と、信じられない光景が、目の前で繰り広げられた。

「真綿……」

勇授くんがつぶやく。

真綿ちゃんは、春歌ちゃんに言われたとおり、ホコリで汚れた地面にひざをつき、頭を地面にこすりつけるように深々とした土下座の体勢になっていたのだ。

「唯夢ちゃんを、解放して……ください……。お願い、します……」

いつもの卑弥呼さま口調ではなく、丁寧な言葉で懇願する真綿ちゃん。

土下座するように言った張本人である春歌ちゃんですら、驚きの表情を浮かべていた。

「お……おーっほっほっほ！　真綿さん、いいですわ！　とてもお似合いの格好です！　なんて素晴らしい気分なんでしょう！」

「唯夢ちゃんを……解放して……ください……」

懇願を続ける真綿ちゃんの弱々しい声が響く。

でも――。

「なかなか楽しい余興でしたが、解放はしませんわ。まだあたしの気は済んでおりませんから。真綿さん、あなたをもっと痛めつけて差し上げます。そのために、この子はまだまだ利用させていただき

ますわ」
「真綿にここまでやらせておいて、卑怯だぞ！」
勇授くんが、怒っている。
普段はいつでもどこか軽い感じの笑い声を響かせているだけの勇授くんが、本気で怒っている。
それを見て、孝徳くんと紗月ちゃんは、驚いていた。
……というよりも、どうしてだろう、彼らはなんとなく、喜んでいるようにも思えた。
一方、勇授くんの怒りの視線を受けている春歌ちゃんは余裕の表情。
いや、彼女もなぜか、満足げな笑みを浮かべているようにさえ見える。
「おーっほっほっほ。無駄話はここまでにしておきましょう。さあ、真綿さん。もう土下座はいいですわ。ゆっくり歩いて、あたしのところまで来てください。もちろん他のみなさんは、動いたりしないようにお願いしますわ」

3

すたっ……。
真綿ちゃんが立ち上がり、スカートについたホコリを払う。
そして、一歩一歩、ゆっくりと歩き出す。

「真綿！」

止めようとする勇授くんの腕を、真綿ちゃんは振り払う。

「止めるでない、勇授。わらわに任せるのじゃ。唯夢ちゃんは、わらわが助け出す。なに、心配はいらぬ。わらわは、卑弥呼の生まれ変わりなのじゃからな！」

そう言い放ち、真綿ちゃんは勢いよく駆け出した。
いまだにナイフをかざし、唯夢ちゃんを抱きかかえたままの春歌ちゃんに向かって。

あまりの勢いに、春歌ちゃんの対応が一瞬遅れる。
その隙を見逃す真綿ちゃんではなかった。
一気に間合いを詰めると、彼女は素早く春歌ちゃんに飛びかかる。

「な……なんですの、真綿さん！　危ないですわよ！？」

その春歌ちゃんから不意にこぼれた言葉。
ナイフを持っていながらも、やはり唯夢ちゃんも、そして他の誰をも、傷つけるつもりはなかったということだろうか。
でも、そんなことはお構いなしに、真綿ちゃんは抵抗する春歌ちゃんに激しくつかみかかる。

「きゃっ！」

唯夢ちゃんが短く悲鳴を上げる。

抵抗していた春歌ちゃんのひじがぶつかったのだ。

だけどその拍子に、唯夢ちゃんは春歌ちゃんの腕からすり抜けることができた。

「唯夢ちゃん、今だよ！　こっちに来て！」

「は……はいです！」

孝徳くんの呼びかけに、唯夢ちゃんが頷いて駆け出す。

「くっ……、逃げられましたわ！　それもこれも、あなたが悪いのですわ！」

「うるさいのじゃ！　わらわは、おぬしなどに負けはせぬ！」

取っ組み合いのケンカに発展していた春歌ちゃんと真綿ちゃんは、お互いに激しい怒号を飛ばし合っていた。

――と、そのとき。

「うっ！？」

真綿ちゃんが胸の辺りを手で押さえて、うめき声を発する。

ボタボタボタ……。

なにか……赤い液体が、薄汚れた地面に広がる。

――それは、血！？

「あ……あたしが悪いんじゃ、ないですわよ!?　あなたが無茶苦茶につかみかかってくるから、そうなったのですわ……！」

真っ青な顔でそう叫びながら慌てて後ずさる春歌ちゃんの手から、赤く染まったナイフがこぼれ落ちた。

カラーン……。

乾いた音を立てて、ナイフは床を転がる。

「ま……真綿っ！」

勇授くんが間髪を入れず真綿ちゃんのもとへと駆け寄る。

角度的に、ナイフが真綿ちゃんの胸を貫いた光景は、勇授くんには見えなかった。

とはいえ、血溜まりが広がり、春歌ちゃんの持っていたナイフが赤く染まっている現状を考えれば、なにが起こったのかは一目瞭然だった。

「ゆ……勇授……！」

身をひねって勇授くんのほうを向き、両手を伸ばすと、ふらつく足取りで彼のもとへと向かおうとする。

勇授くんは、すぐに彼女のもとへたどり着いた。

そして倒れ込む真綿ちゃんを、しっかりと抱きとめた。

「真綿っ！　しっかりして！　大丈夫!?」

勇授くんの腕の中で、真綿ちゃんは苦しげな笑みを浮かべる。

「わ……わらわなんかを……心配して、くれるのかや……？」

乱れた呼吸を吐き出しながらも、震える声でそうつぶやいた。

「当たり前だよ！　無理して喋らないでいいから！　大丈夫だから！　ね？」

ぎゅっ……。

勇授くんの気遣いを今まさに全身に感じ、真綿ちゃんは彼の背中に両腕を回し、力を込める。

「わらわは、勇授のことが、ずっと好きじゃった……」

ちょっと恥ずかしげに頬を染めながら、控えめに告白の言葉を紡ぎ出す真綿ちゃん。

そして、

「勇授は、どうかや……？」

上目遣いの視線を向け、尋ねる。

「ぼくも……、真綿のことが好きだよ」

それは素直な言葉のさざ波となって、勇授くんの唇から自然と流れ出していた。

そこでふと、勇授くんは怪訝な表情を浮かべる。

「あ……あれ？　ナイフで切られたはずなのに、血が出てない？」

そう。

あれだけの血が出ていたはずなのに、真綿ちゃんの制服にはその

血の跡も、ナイフで切り裂かれた跡もなかったのだ。

ぎゅ〜〜〜〜〜〜っ！

突然、真綿ちゃんはよりいっそう腕に力を込め、強く勇授くんを抱きしめ始めた。

「もう離さないぞよ！」

「え？　え？　え？」

困惑する勇授くんと、そんな彼を思いっきり強く抱きしめている真綿ちゃん。

「よかったね、真綿ちゃん」

そんなふたりを見下ろし、にっこりと笑っているのは、真綿ちゃんをナイフで突き刺したはずの春歌ちゃんだった。

「え？　え？　ええ？」

そしてさらには、スーツの男たちまでもが、

「真綿さん、おめでとうございます」

などと言いながら、ふたりのそばに集まってきていた。

「え？　え？　えええ〜〜！？」

なにがなにやらまったくわからず呆然としている勇授くんと、満足顔で勇授くんに抱きついている真綿ちゃんを、今この場にいる全員が取り囲み、そして笑顔を浮かべていた。

4

「わらわはずっと、勇授のことが好きだったのじゃ」
「あははははは。うん、さっきも聞いた」

みんな落ち着いたところで、微かに頬を染めながら再び放たれた真綿ちゃんからの告白の言葉に、勇授くんはいつもどおりの笑い声を返す。

さっきは自分も好きだと答えてくれたのに、と一瞬カチンときているようだったけど、真綿ちゃんは構わずに話し続ける。

ずっと——それこそ幼稚園くらいの頃からずっと、勇授くんのことが好きだった真綿ちゃん。

一緒にいるのが当たり前だと思っていた。

もちろんそんな小さな頃のこと、それが恋愛感情だなんて考えもしない。そういった感覚すら、まだなかったのだろう。

でも真綿ちゃんは、小学校三年生になったとき、勇授くんと違うクラスになってしまった。

隣の家なのだから、それまでと変わらずに仲よくしてもよかったとは思うけど、まだ幼い彼女には、普段から近くにいないだけで遠い存在のように思えてしまった。

クラスの友達から一緒に帰ろうと誘われて断るのも悪いという思いもあり、ほとんど勇授くんと会わない日々が続いた。

そして、会わないことで彼女は、自分の気持ちに気づく。

勇授くんのほうから話しかけてくれれば、真綿ちゃんだって同じクラスだった頃と同じように楽しく話せたかもしれない。

だけどそれもなかった。勇授くんはあまり自分から積極的に行動

するような人ではなかったからだ。

結局そのまま、二年の月日が流れた。

そして五年生で再び同じクラスになれた真綿ちゃんは、二度と後悔はしたくないと、自分から勇授くんに話しかけた。

その前の晩、真綿ちゃんはこんなことを考えていた。

――もし同じクラスになれたら、精いっぱい頑張ろう。そうだ、インパクトも大切だろうから、なにか強く印象に残る方法を探そうかな。

そんな理由で彼女は、女王卑弥呼の生まれ変わりだと言って、自分のことを「わらわ」と言うようになったのだ。

……いくら好きな男の子の印象に残るためとはいえ、方向性としては微妙かもしれないけど。

ともかく真綿ちゃんは、直接好きと言うのは恥ずかしくて無理だったものの、毎日勇授くんのそばに行って、ひたすらいろいろと話すようになった。

楽しく毎日勇授くんとお喋りできる。

それだけでも充分満足だった。

ただ、ちょっとはっきりしないというか、つかみどころがない勇授くんの性格のせいもあって、恋人、という雰囲気にはどうしてもならない。

真綿ちゃんとしては結構必死に頑張ってアピールしていたつもりだけど、勇授くんは激しく鈍感だった。

さすがに三年間も毎日のように会って仲よくお喋りに興じ、クラスメイトからも「あのふたり、できてるよね」などとささやかれる

ようになっているというのに、いまだに手も握っていない状態では、真綿ちゃんとしてもイライラしてくる。
スキンシップがあるとすれば、勇授くんのとぼけた発言にツッコミを入れるときくらいだった。

――ここはひとつ、大がかりな作戦を立ててでも、一気に進展したいところじゃのぉ。

そう考えた真綿ちゃんは、下準備を整えて今回の作戦に打って出た。
作戦は、中学二年生になったそのときから、始まっていたのだ。

お手伝いさんだと言っていたガロさんだけど、どうやら彼女の家の私設警備隊とでも言うべき存在だったようだ。
大金持ちのお父さんを護るための警備隊のうち、数人は真綿ちゃんや彼女のお母さんの警護にもあたっていたらしい。
その中で、真綿ちゃん担当だったのが、ガロさんだった。

真綿ちゃんはガロさんに頼み、いろいろと調査してもらっていた。
作戦の大まかな流れ自体は真綿ちゃんが考えたようだけど、彼女に細かく作戦を練っていくことなんてできはしない。
だからガロさんが調査して、真綿ちゃんの作戦を練り固めていった。

真綿ちゃんが卑弥呼の生まれ変わりだと言い張っていることを知っていたガロさんは、それも利用しようと考えた。
そこで出てきたのが、大化の改新の立役者たちだ。
歴史の授業で誰しも聞いたことがある名前、だけどそれほど正確なデータとして残っているわけでもなく、真実を詳細まで完全に知ることはできない。歴史なんて結構、そんなものだったりするけど。

そういったところを利用したのだ。

もちろん、真綿ちゃんが中大兄皇子の子孫で、勇授くんが中臣鎌足の子孫で、などといった話も全部デタラメのでっち上げ。

当然ながら、春歌ちゃんが蘇我入鹿の子孫だということも暗殺された記憶を受け継いでいるということも含めて、そのデタラメ話の一部だった。

春歌ちゃんは真綿ちゃんのいとこだった。同じ町内に住んでいるのに、あまり会うことはなかったみたいだけど。

とはいえ、年に数回くらいは会っていたし、携帯電話の番号も知っていた。

真綿ちゃんはその春歌ちゃんに協力をお願いした。

それだけではなく、孝徳くんや紗月ちゃん、さらには勇授くんの妹である唯夢ちゃんも協力者だった。

じっくり時間をかけて、舞台の土台を固め、最終的な作戦に出る。

自分が死にかけているといった極限状態を作り上げ、勇授くんの本音を聞き出そうという作戦を。

そのために、春歌ちゃんはずっと敵役を演じてくれていた。

さっき真綿ちゃんに「よかったね」と話しかけたときの様子からすると、普段はあんな喋り方——丁寧だけど少し人を見下したような喋り方なんて、していないのだろう。

真綿ちゃんをナイフで刺した（マネをした）ときに流れ落ちた血も、もちろんニセモノの血のりだ。

それから、春歌ちゃんが従えていた黒いスーツの男たちは、真綿ちゃんの家の施設警備隊の人たちだった。

その中には、同じような格好の人たちばかりで気づかなかったけ

ど、ガロさんも混じっていた。

「やあ、みなさん。どうも」

ガロさんは一歩前に出ると、みんなに頭をかきながら声をかけていた。

☆☆☆☆☆

「と、まぁ、そういうわけだったのじゃ。……勇授、みんなで寄ってたかって騙したような感じになってしまって、悪かったの」

すべてを白状した真綿ちゃんは、ポツリとそう言って締めくくった。

そして。

「改めて言うぞよ。わらわは……勇授、おぬしのことが大好きじゃ」

勇授くんの目を見据えながら、はっきりとした声で三度目の告白の言葉を口にした。

それを聞いた勇授くんの今度の答えは――。

「あはははは。今さらなに言ってるんだか」

「え？」

キョトンとした表情で聞き返す真綿ちゃん。

「だってほら、約束したでしょ？」

「ええ？」
「結婚しようって。覚えてないの？」
「えええ！？」

衝撃の事実を受けて、真綿ちゃんの驚きの声が響く中、

「……幼稚園の頃だけど」

勇授くんはそうつけ加えた。
幼稚園の頃、真綿ちゃんの家に行っていつもどおり庭で遊んでいるときに、こんな会話があったらしい。

「おおきくなったら、あたしをおよめさんにして！」
「うん、いいよ」
「ぜったいだよ！」
「うん。おとこにごんはないんだよ！」

まだよくわかっていない幼い頃の、他愛ない会話、といった感じだろう。
現に真綿ちゃんは、まったく覚えていないようだった。
でも勇授くんは、しっかりと覚えていたのだ。

「あらあら、この子たちったら。どこでそんなことを覚えたのかしらね、ふふふ」

真綿ちゃんのお母さんが楽しそうに幼いふたりを見つめている姿が思い浮かぶ。
一方、そんな昔のことを聞かされた真綿ちゃんは、いつもの強い口調で言い返していた。

「ア……アホか、おぬしは！　そんな昔の約束を、勇授は守ると言うのかや！？」

そう言いながらも、嬉しそうな表情はまったく隠せていない彼女。

「あはははは。うん。だって、男に二言はないんだよ」

ぼっ！

勇授くんが答えると、真綿ちゃん一気に真っ赤になっていた。

「し……仕方がないの、わらわも腹を決めるとしよう。法律で許される歳になったら、おぬしのお嫁さんになってやってもいいぞよ！」

自分から告白したはずなのに、彼女はやっぱりいつもどおりということか、そんな上から目線の物言いで返事をする。

「うん」

にこっ。

そんな真綿ちゃんに、勇授くんは優しく微笑み返す。

ふたりの様子を、周りのみんなが温かな視線で見つめていた。

5

相思相愛だと確認し合い、友人たちもそれを知ったことで、真綿ちゃんと勇授くんの生活は劇的に変化した。

……かというと、実際のところはそうでもない。

もちろんクラスメイトである孝徳くんと紗月ちゃんは、毎日のようにふたりを冷やかしているし、それを見て他のクラスメイトも「あ～、あのふたり、やっと上手くいったんだね」と悟り、冷やかしてきたりはしていた。

とはいえ、真綿ちゃんのほうは真っ赤になって恥ずかしがってくれるものの、肝心の勇授くんはいつもどおりの軽めの笑い声を返すだけだった。

真綿ちゃんの反応はなかなか面白いかもしれないけど、ふたり揃って恥ずかしがってくれないと、いまいち、からかいがいもないと言わざるを得ないだろう。

なにせ、真綿ちゃんが真っ赤になって慌てふためいている姿なんて、みんな見慣れているのだから。

「勇授はどうしてそうなのじゃ！　もっとわらわを大切に扱ってほしいのじゃが！」

「あはははは。真綿は大切に扱わなくても大丈夫でしょ。頑丈にできてるから」

「だ……誰がじゃ！　はっ……！　おぬし、わらわが最近ちょっと太ったことを言っておるのかや！？」

「あはははは。いや、そんなこと知らなかったけど」

「うぬっ！？　よ……余計なことを言ってしまったのじゃ！」

「あはははは。でも、太ったなんて全然わからないよ？」

「み……見えないところにお肉がついておるのじゃ！　というか、太ったなどと言うでない！」
「あはははは。自分で言い出したくせに」
「う、うるさいのじゃ！」
「あはははは。でも見えるところには、確かにお肉がついてないみたいだね～」
「ど……どこを見ておる！　このスケベが！」
「あはははは」

いまいち成長が感じられない胸の辺りを両手で隠しながら、真綿ちゃんが勇授くんに蹴りを入れるけど、勇授くんはやっぱりいつもの笑い声を響かせる。
これまでと変わらない、いつもどおりのふたりだった。

こんな感じで、真綿ちゃんはいつでも真っ赤になって慌てている。もっともこの場合、恥ずかしさというよりは、怒りで真っ赤になっているという状態になるだろうけど。

「まったく勇授は……。どうしてこうも、乙女心というものがわからぬのじゃろうか」
「あはははは。真綿と乙女が、どうしてもイコールにならないなぁ」
「……前から思っておったのじゃが、おぬしはどうしてそう、わらわが怒るようなことを口走るのじゃ？　殴られたり蹴られたりするのは、予想できるじゃろうに」
「あはははは」
「……マゾっ気がある気がするぞよ？」
「あはははは」

そんなふたりにツッコミを入れるのは、いつもこのふたり。

「ふふっ、真綿ちゃんは完璧にSだし、お似合いよね」
「にゃははっ！　言えてる言えてる！」

紗月ちゃんと孝徳くんも、これまでどおり、いつもふたりで横に並びながらツッコミを入れる役目を果たしている。

「なぬ！？　わ……わらわのどこがSだと言うのじゃ！？」
『全部』
「……！？」

声を揃えて返された答えに、真綿ちゃんが絶句している。

「あはははは」

もちろんその隣では、勇授くんが笑っていた。

そうそう、真綿ちゃんは結局そのまま、「わらわ」とか、卑弥呼様っぽいような喋り方を崩していない。
彼女は今回の作戦のために、周りのみんなの祖先の話なんかをでっち上げたと白状していた。
大化の改新関連の話は、まったくの作り話だった。
もちろん、女王卑弥呼の生まれ変わりだというのも、ウソだったことになる。

真綿ちゃんは勇授くんとの仲を深めたくてそう言っていたと語った。
それならば、その目標が達成された今、もうそんな言葉遣いをする必要もないはずだ。
でも真綿ちゃんは、言葉遣いも態度も改めるつもりはないようだった。

「ふふふふ、じゃがこの喋り方、結構可愛いであろう？」

とご満悦の様子の真綿ちゃん。相当気に入っているようだ。

それを聞いた勇授くんはもちろん、

「あはははは」

と笑っていた。

勇授くんのほうも、なにも言ってあげたりはしていないけど、そんな真綿ちゃんの口調が随分とお気に入りのようだ。

6

そんな平和な日々の中で、勇授くんがポツリとつぶやいた。

「う〜ん、ほんとにぼくは真綿と恋仲になって、よかったのかなぁ……？」

いつもどおりみんなに冷やかされ、真綿ちゃんが真っ赤になって怒りを勇授くんにぶつけ、蹴りを入れる。

ただちょっと違っていたのは、それが飛び蹴りだったことだ。

少し太ったとは言っていたものの、かなり小柄な真綿ちゃんは、当然ながら標準よりも軽い部類に入る。

それでも彼女の蹴りは、勇授くんを吹っ飛ばすには充分な威力を持っていた。

ま、勇授くんがぼけ〜っとしていたから、という理由もあっただろうけど。

勇授くんを吹っ飛ばしてしまった真綿ちゃんは、一瞬びっくりして心配の視線を向けてはいた。

でも、すぐに勇授くんがいつもの笑いを浮かべていたので、ほっと息をつき、今では冷やかしの言葉をかけてきた孝徳くんと紗月ちゃんに怒鳴り声をぶつけている。

その直後の、つぶやきだった。

マゾっ気があるとか言われていたけど、勇授くんはべつにそういうつもりでもなかったようだ。

もっとも、完全に否定はできないとは思うのだけど。

ただ勇授くんの場合、素直すぎる性格で、ついつい思ったことを

そのまま口に出してしまうだけなのだろう。

変な喋り方でわがままな真綿ちゃんのすべてを、優しく受け止めてあげている勇授くん。

そんな彼が、こんなことをつぶやくなんて、驚きではあった。

勇授くんにも、普通の感覚ってものがわずかばかり残っていた、ということか。

さて、そんな疑問を漏らした勇授くんではあったけど。

「わ……わらわと勇授は、べつにそういうのではないのじゃ！」

「にゃははっ！　でもつき合ってるんでしょ～？　だったらもう、キスくらいしてたっておかしくないじゃんかっ！」

「ふふっ、そうね。わたしたちの前ではいつも痴話ゲンカしてるふたりでも、ふたりきりならラブラブなんじゃない？」

「そ……そんなことはないのじゃ！　というか、痴話ゲンカとか言うでない！」

「にゃははっ！　でもほら、結婚の約束までしてたじゃん！　やっぱり痴話ゲンカでしょ？」

「ふふっ、そうね。さすがだわ」

「ち……違うと言うておるじゃろう！」

真っ赤になって怒鳴り散らしている真綿ちゃんの様子を、勇授くんはじっと眺めていた。

「ぬ……勇授、なにを見ておる！　そうじゃ、おぬしからも、こやつらになにか言ってやるのじゃ！」

「あははは」

真綿ちゃんからの突然の言葉に、勇授くんはいつもの笑い声を返

す。
そして、こう言った。
「真綿と一緒にいるとすごく楽しいよ。キスはまだだけど、でも近いうちに……」
「な……なにを言うておるか！」
ゲシッ！
いや、言い終わる前に再び吹っ飛ばされてしまっていた。
「あはははは」
またもや蹴り飛ばされ、机やら椅子やらにぶつかり、無様に倒れながらも、勇授くんはいつもどおりの笑顔。
「まったくおぬしは、変わらぬのぉ……。でも、そんなところも、好きなのじゃが……（もごもご）」
最後はほとんど聞こえないくらいだったけど、真綿ちゃんは恥ずかしそうにそんなことを口走っていた。
「……うん、これでいいんだ」
勇授くんのほうも、さっきの自問に、自答を得ることができたようだ。
恋愛の形は様々だというし、これが彼らなりの答えなのだろう。
客観的に見てちょっと心配ではあるけど……。
勇授くんはケガが絶えなさそうだ。
でも藤原流とかいう拳法を会得している彼なら、たいして痛手で

はないのかもしれない。
……ま、末永くお幸せに。

さてと、そろそろ行こうかな。
きっと首を長くして待っているだろうし。
ボクはふたりのもとを去り、教室の窓から晴れ渡った青空へと飛び立った――。

☆

「ふう、これで終了じゃな。いやはや、勇授とやらが鈍感なせいで、えらく時間がかかってしまったのぉ」

わらわはそうつぶやき、凝った肩をぐるぐると回す。

いやまぁ、もちろんわらわの肩が凝ったりするわけないのじゃが。

ま、気分の問題じゃな。

わらわは女王卑弥呼じゃ。

正確に言えば、その幽霊、ということになるがの。

わらわがあの真綿という女の子に乗り移り、同調してから三年以上が経ってしもうた。

時間はいくらでもあるわけじゃから、三年くらい、たいした長さではないのじゃが。

それでも、少々長くかかりすぎたのぉ。反省せねばなるまい。

三年ほど前、わらわは真綿の切ない想いを感じて、彼女に乗り移った。

それによって、彼女は自分のことをわらわと言い、あのような態度を取るようになった。

性格に関しては、もともと素質があったと思うのじゃがの。

本人は自分で考えて、わらわの生まれ変わりだと言うようになったと思っておったようじゃが、実際にはわらわがそう思い込ませておったのじゃ。

真綿の願いを叶えるため、わらわはずっと彼女と同調しておった。

わらわにとって、人の願いを叶えるのは、楽しいゲームなのじゃ。

勇授が鈍感じゃから、なかなか成功にたどり着けずにおったが、ようやくクリアできた。

やはり目的を達成したあとは、清々しい気分になるのぉ。

と、そんなわらわのもとに、ひとりの男が飛び寄ってきた。

「卑弥呼様ぁ～～～、遅くなってすみません～～～！」

ペコペコと頭を下げながら、わらわが浮いているこの上空まで飛んできたのは、わらわの忠実なしもべ、優雨矢（ゆうや）じゃ。

わらわが邪馬台国で女王をしていた頃、そばに仕えてずっと力になってくれておった。

五歳ほど歳下だったじゃろうか、若干頼りなさはあったものの、わらわのすぐそばにいてよいのは、この優雨矢だけと決めておる。

もちろん今ここにいる優雨矢も、わらわと同様、とっくに幽霊になっているのじゃが。

「これ、優雨矢！　遅かったではないか！」

「すみません。ボクの場合、すぐ近くにいないと彼らの様子を見ることができないもので。……有能な卑弥呼様と違って」

おっと、そうじゃった。

わらわのゲームは、真綿と勇授がお互いの想いを確かめ合った時点で終りを告げた。

そこから先は、わらわは真綿の中から飛び出し、ゲームの余韻に浸りながらふたりの様子を観察しておった。

わらわの力を持ってすれば、清々しい青空に包まれた上空から彼らの様子を観察することもできる。

じゃが、優雨矢にはそこまでの力はなかったのじゃったな。

「ふふふふ、そうであったの！　ま、わらわが有能すぎるのが悪いのじゃな！　すまなかったのぉ！」
「ほっ。おだてに乗りやすい人でよかった……」（ぼそっ）
「ん？　なにか言うたかや？」
「いえ、べつに」

ふむ……。
少々気にはなったが、ま、今日のわらわは機嫌がよいし、不問としておこうかの。

それにしても、「れんあい」というものは実に面白いものじゃ。
真綿と勇授のふたりにも、存分に楽しませてもろうた。
純粋で温かく、ときに激しく、ときに淡く切なくて、なんとも飽きさせない感覚じゃ。
わらわの時代の男どもときたら、国を支配することしか頭にない、つまらん奴らばかりじゃったしのぉ。

……おっ、またどこかで、切なくすすり泣くおなごがおるようじゃ。
どれ、わらわが乗り移って、「れんあい」を成就させてやるとするかの♪
ふふふふふ、また新しいゲームの始まりじゃ。
楽しみじゃのぉ。今度はどんな展開を見せてくれるのか。

わらわは自然とこぼれる含み笑いを止めることも忘れ、意気揚々と飛び立つ。
そして、次なる楽しい「れんあい」ゲームの舞台へと向かうのじゃった。

「ちょ……ちょっと、待ってくださいよぉ～！　卑弥呼様ぁ～！」

慌てた様子で必死についてくる優雨矢の悲痛な叫び声を背後に受けながら――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2307y/

あの娘は電波か本物か

2011年11月6日01時02分発行